

国道161号線バイパス関連遺跡調査概要(昭和56年度) 1

# 針江遺跡群旭遺跡発掘調査概要

—高島郡新旭町所在—

1982

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

## 正誤表

頁	行	誤	正
はしがき	6行目	水下水位	地下水位
10	左・12行目 左・14行目 左・16行目 左・20行目	堀下げる	掘下げる
10	右・8行目	(図版6-下)	トル
11	右・31行目	(図版?)	(図版5)
13	17行目	掘込まれる	掘込まれた
14	第9図		E-Wを書き加える
E		W	
18	24行目	側縁部	側縁部
27	番号24	黒斑	黒斑
図版13		堀川遺跡	堀川遺跡

## はしがき

新旭町平野部に分布する遺跡の実態は、昭和55、56年の2年間にわたって実施した試掘調査によってしだいに明らかになってきた。とりわけ当該地域は、地下水位が高く、植物質の遺物がよく保存されており、弥生時代～古墳時代にかけての木製品の宝庫といっても過言ではない。

今回、国道161号線バイパス建設に伴って路線内の埋蔵文化財の発掘調査を実施するにあたり、水下水位の関係から従来の調査のように素掘りで発掘を行うことがひじょうに困難であるため、鋼矢板でトレンチを締切り、排水しながら調査をすすめて行く方式を試験的に実施することになった。調査期間の関係から150m<sup>2</sup>のトレンチではあったが、幸い調査は大きな障害もなく無事終了し、古墳時代前～中期（4～5世紀）の土器や木製品など多数の遺物が出土した。これら遺物には、畿内文化が湖西地方に浸透して行く過程を反映している土器や、民具との関連がうかがえる木製品があるなど興味深いものがある。

発掘調査の正報告書は、後日刊行の予定であるが、とりあえず発掘調査の経緯と調査成果をとりまとめ、その概要を報告し、遺跡理解の一助としたい。本書が、湖西地方の歴史を考えるための資料となれば幸いである。

なお最後に、調査に協力を惜しまれなかった関係者、地元新旭町、同町教育委員会の各位に感謝したい。

昭和57年3月

滋賀県教育委員会事務局  
文化財保護課長

外 池 忠 雄

## 例　　言

1. 本書は、建設省の実施する国道161号線バイパス工事に伴う、高島郡新旭町所在針江遺跡群の旭遺跡内における試験調査の概要報告書である。
2. 本調査は、滋賀県教育委員会の指導のもとに、建設省からの委託（11,961,000円）を受けて財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。
3. 調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、滋賀県文化財保護協会嘱託宮崎幹也、岡尾崎好則を調査員に得て実施した。
4. 調査にあたっては、新旭町教育委員会ならびに同委員会主事岡司高志氏から格別の配慮を賜った。記してお礼申しあげたい。
5. 調査・整理にあたっては、以下の諸氏の参加と協力を得た。

神谷友和（滋賀県文化財保護協会）、山口順子（滋賀県埋蔵文化財センター）、堀内宏司（調査員）、池田俊哉（龍谷大学）、和田光生（大谷大学）、寿福滋。

6. 本書は、兼康保明（第1、2、3、4、7章2、8章1）、宮崎幹也（第5、6、7章1、8章2）が共同執筆した。
7. 本書の観察表は、土器を宮崎、木製品を山口順子が作成した。
8. 図面・写真については、現場での実測図・写真撮影は、宮崎、尾崎好則があたった。遺物実測は、宮崎、神谷友和、堀内宏司、山口があたり、寿福滋が写真撮影を行った。整図は、宮崎、兼康、池田俊哉、山口が行った。
9. 木製品の実測は、木目を精密に実測せず、かわって断面図に年輪を模式的に図示した。

なお木製品については、現在のところ滋賀県埋蔵文化財センターの木器専用水槽に入れて保管している。

## 目 次

はしがき

例 言

第1章 調査にいたる経緯.....	1
1. 分布調査	
2. 試掘調査	
3. 低湿地での調査の問題点	
4. 試験調査	
第2章 調査の経過.....	4
1. 調査の方法	
2. その他	
第3章 試験調査の結果と問題点.....	7
第4章 遺跡をとりまく環境.....	8
1. 地理的環境	
2. 周辺の遺跡	
3. 位 置	
第5章 調査日誌(抄) .....	10
第6章 調査の所見.....	12
1. 層 位	
2. 遺 構	
第7章 出土遺物.....	15
1. 土 器	
2. 木製品	
第8章 要 説.....	19
1. 造構・土層のまとめ	
2. 上器の年代	

## 図 版 目 次

図版 1 遺跡遠景

- (上) 旭遺跡調査地区全景(西北より)  
(下) 吉武城遺跡(西北より)

図版 2 調査状況

- (上) 鐛矢板打込状況(南より)  
(下) グリッド調査状況

図版 3 造構(1)

- (上) SD-1 木製品出土状況(北東より)  
(下) 造構全景(北より)

- 図版 4 遺構（2）  
 　（上）木製品出土状況  
 　（下）ピット1（南より）
- 図版 5 下層調査状況（1）  
 　（上）第IV層　流木出土状況（南より）  
 　（下）第IV層　流木発り検出状況（北より）
- 図版 6 下層調査状況（2）  
 　（上）Aグリッド掘下げ  
 　（下）Aグリッド土層堆積状況（東より）
- 図版 7 土器（1）壺・高杯・甌
- 図版 8 土器（2）壺・甌・ミニチュア土器
- 図版 9 土器（3）高杯・器台・壺  
 　（上）高杯（脚部ほか）  
 　（下）高杯・器台・直口壺・小壺
- 図版10 木製品（1）
- 図版11 木製品（2）
- 図版12 木製品（3）
- 図版13 周辺遺跡分布図
- 図版14 トレンチ位置図
- 図版15 遺構平面図
- 図版16 トレンチ断面図
- 図版17 土器実測図（1）
- 図版18 土器実測図（2）
- 図版19 木製品実測図（1）
- 図版20 木製品実測図（2）

### 挿 図 目 次

第1図	森浜遺跡新川改修工事に伴う調査状況	3
第2図	土溜工詳細図	5
第3図	調査風景	10
第4図	軟弱化したトレンチ周囲	11
第5図	トレンチ内排水風景	11
第6図	調査地付近地質柱状図	12
第7図	土坑（SK-1）実測図	13
第8図	ピット（Pit-1）実測図	14
第9図	溝（SD-1）断面図	14
第10図	庄内式土器（甌）実測図	20

# 第1章 調査にいたる経緯

## 1. 分布調査

国道161号線高島バイパス敷設計画に伴って、滋賀県教育委員会は昭和45年度国庫補助事業として、新旭町、安曇川町、高島町の三町15kmにわたって分布調査を実施した。

安曇川左岸の新旭町の平野部は、昭和33年に針江で農業排水路を掘削中、弥生式土器や木器の出土が知られていたが、この分布調査によって、平野を南北に縦断するかのごとく、北より針江川北遺跡、針江北遺跡、針江中遺跡、針江南遺跡、深溝条里遺跡、正伝寺南遺跡と弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡が密集して、一大遺跡群を形成していることが明らかにされた。また、これまで『高島郡誌』に紹介されていた吉武城跡（吉武城遺跡）や新庄城跡（新庄城遺跡）も、初めて明確に大縮尺の地図に標示されることとなった。これら分布調査の成果は、概要報告書にまとめられて<sup>⑨</sup>いる。

## 2. 試掘調査

昭和55年になって、新旭町の平野部に所在するバイパス路線内の埋蔵文化財の調査について、建設省近畿地方建設局滋賀国道工事事務所と滋賀県教育委員会文化財保護課の間で協議がもたれた。この時点ではバイパス路線の用地はほぼ決定しており、また針江地区のは場整備事業に伴い昭和53年から針江遺跡（群）の発掘調査が毎年実施され、遺跡の状況等については昭和45年の分布調査当時よりも豊富なデータが得られていた。そのため、協議は具体的な調査内容となった。ただ針江遺跡（群）の評価については、は場整備に伴う発掘調査の場所と路線が必ずしも近接しておらず、これまでの調査データも地点によって住居跡等の遺構が検出される地域があったり、多量の遺物（主に土器）包含層が続く地域、あるいは二次的な遺物堆積の認められる地域etc.と多様で、路線内の各遺跡の広がりを知るのに決して十分な資料とは言えなかった。また、は場整備に伴う調査では、調査対象となった水路の床面の高さよりも下層にさらにもう一層、包含層や遺構が複合するのかどうか不明であった。このようなことか

ら、分布調査の結果に従い、さらにその後の新知見を参考にまず試掘調査を行って、各遺跡のバイパス路線内での広がりと様相を把握することとなった。

試掘調査は、昭和55、56年度の2カ年に渡って、財團法人滋賀県文化財保護協会に委託して実施した。昭和55年度の試掘調査は、北は田井川から南は針江大川までの区間を、路線のセンター付近に約7m間隔にトレンチを掘って行った。この区間では、北から吉武城遺跡、円若寺遺跡、針江川北遺跡、針江北遺跡、針江中遺跡が調査対象となつたが、円若寺遺跡が路線内に該当しなかつた外は、ほぼ分布調査の結果と一致した。ただ針江川北遺跡はさらに北へ伸び、吉武城遺跡付近から田井川近くにまで広がる。この新たな遺跡の広がりを、針江川北遺跡と區別して字名で旭遺跡と命名しておく。なお、吉武城遺跡は路線敷地に隣接し、南北コーナーと堀の一部が路線内に含まれる。調査の結果を総合すると、遺跡は地表下1.5~2mの間に上下2層（上層：奈良~平安時代、下層：弥生時代後期~古墳時代）の遺物包含層と遺構面のある複合遺跡であることが明らかになった。

昭和56年度は、針江大川より南、安曇川までの区間を実施した。この間には、針江南遺跡、正伝寺南遺跡、新庄城遺跡が調査対象となり、前年度同様ほぼ分布調査における遺跡の広がりと一致した。ただ、本区間は遺物包含層、遺構面が前年度の調査結果より浅い位置にあり、針江大川以南の針江南遺跡、正伝寺南遺跡はあるいは微高地に位置するものであるかもしれない。また、正伝寺南遺跡から新庄城遺跡間は、礫層が続く氾濫原であった。

この昭和55、56年度の試掘調査は、遺跡の広がりと土層図からなる概要報告書をまとめた。<sup>③</sup>

### 3. 低湿地での調査の問題点

昭和55年度の試掘調査の際、当初から予想されていたことであるが、当該地域は地下水位の高い畠田地帯であり、トレンチ内の湧水が大きな障害となつた。過去の低湿地帯における調査で具体的な例を示すと、本地点よりさらに湖岸寄りの湖周道路での素掘りの試掘調査では、地表下約1mほど掘下げると湧水や壁面の崩れがあり、さらに下層まで十分調査できなかつた苦い経験がある。<sup>④</sup>そのため、近接する新川舟溜り工事に伴う森浜遺跡の調査では、護岸用の鋼矢板を利用してある程度の地下水を遮断



第1図 森浜遺跡新川改修工事に伴う調査状況 ことができた。また、同じ森浜遺跡の新川改修工事に伴う調査では、琵琶湖の潟水期をねらって鋼矢板を用い壁面に傾斜をもたせて地表下約1.2mほどの発掘を行ったが、水中ポンプを24時間フル回転させても遺構面が十分に乾ききらず、作業のたびごとに泥沼化してしまうありさまで<sup>⑤</sup>あった。

このような過去の調査例と、試掘調査中の遺構検出の困難さ（地盤の粘土層が水を含んで軟弱化することと、湧水、壁面の崩壊）から、昭和55年度の試掘調査概要では次のような問題点をあげている。

「……試掘の結果から考えて、本格的な調査に入った場合、まず第1に問題となるのは湧水の問題である。上層は、（トレンチの）壁面に傾斜をつけることによってなんとか調査できたとしても、下層の場合には難しい。下層になると湧水のため壁面が崩れ、危険で調査に支障をきたすばかりでなく、隣接地にまで影響をおよぼすことが十分考えられる。また、当然のことであるが、排水の不十分な泥湿地の調査では、十分に遺構を検出することは不可能で、自ら遺跡を破壊して行くことにもなってしまう。したがって、調査実施の際は鋼矢板によって周囲を仕切って調査せざるをえないであろう。その場合の下層の調査深度であるが、下層の包含層を除去した状態での遺構の検出を考えれば、概ね地表下2～3mが対象となる。ただ、溝や井戸などさらに深くなる遺構や、場所によっては部分的に深くなるところも出てこよう。こうした事態に対しても、事前に安全対策を検討しておく必要があろう……」<sup>⑥</sup>

鋼矢板による四方締切りのトレンチ内で発掘調査を実施した本県の例としては、昭和56年4月から開始された大津市本堅田町浮御堂遺跡の調査が、低湿地、水辺での試行錯誤した発掘調査の終止符であった。調査は、満月寺の石垣に平行して浜に打込ん

だ工事用矢板を利用して締切り（一区画  $6\text{m} \times 30\text{m}$ ）、トレンチ内の四周に細い排水溝を掘り、トレンチ端に排水用ポンプを据付け終日排水しながら実施した。その結果、湖面より  $2\text{m}$  下まで掘進んでも杭跡の小さなピットを十分に検出することができたし、調査者自身が遺構面を踏んでこねまわし破壊するようなことはおこらなかった。浮御堂遺跡では、その後浮御堂周辺の発掘調査を全てこの方式で実施しており、調査面をほぼ調査に支障のない硬度に保って成果をあげている。<sup>⑨</sup>

#### 4. 試験調査

以上、過去の調査結果と昭和55年度の試掘調査結果などを資料として、昭和56年4月から本調査の協議を重ねた。しかし、これまで県下の国道関係の発掘調査で鋼矢板を使用した前例がなく、かつ調査期間が延びると鋼矢板をリースした場合調査経費が大きく変更するなど問題があった。そこで、本年度は鋼矢板を使用して発掘調査を実施した際に生じる現場、経費、その他連絡事項の効果、問題点をつかむため試験調査として行うことになった。なお、試験調査の鋼矢板による土溜工の設計については、滋賀国道工事々務所に協力を求めた。また、調査地点の選定は、地盤が悪く、しかも資材搬入の比較的容易な場所を何カ所か候補地に選び、両者で協議して調査地点を決定した。調査面積については、協議当初は  $600\text{m}^2$  を予定していたが、調査実施の決定に至るまでの協議が長引き、積雪や正月休みなどの関係から  $150\text{m}^2$  まで調査面積を縮小せざるを得なくなってしまった。

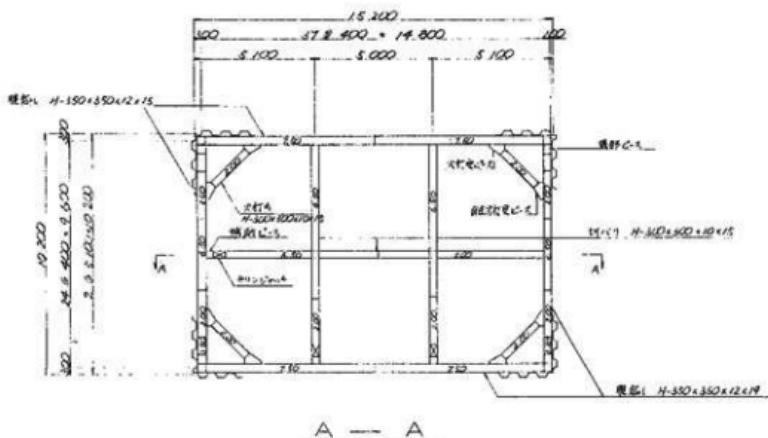
発掘調査も鋼矢板内で実施するため安全対策等に従来とは異なる問題が生じてきたため、試験的に発掘作業（人夫、機械etc.）を業者に委託することとなった。

## 第2章 調査の経過

### 1. 調査の方法

（設計） 調査は、縦  $10\text{m}$  、横  $15\text{m}$  の長方形のトレンチの四周を S P II型の鋼矢板で囲み、地表下  $1\text{m}$  まで調査の後、切梁を入れて補強し、地表下  $2.5\text{m}$  までの調査が可能な設計（第2図）とした。この設計については、滋賀国道工事々務所の協力を得た。

（排水） 発掘調査は、鋼矢板内の四周に排水溝を掘り、コーナー2カ所に2インチ



第2図 土掘工詳細図

1.8 kwのポンプを2～3台備え付け、24時間排水につとめた。また、トレチの周辺には適当な排水溝がなく、調査中の雪解けで湿地化してしまったため、トレチ内の排水を、トレチよりやや離れた外周に掘った排水溝に流し、さらに中継してポンプアップし小川にまで延ばして排水を処理せねばならなかった。

(地盤) トレチ内の地盤（調査面）の軟弱化は当初から予想されていたことであり、そのために鋼矢板を使用して締切りを行ったのである。幸い調査面は湖水、壁面の崩れを防止し十分な効果をあげた。また、予想していなかったトレチ内の積雪とその解けた水をも完全に排除し、調査面を調査に支障のない硬さに保つことができた。しかし、トレチの外周部は、もともと湿地であったうえに雪解けなどで地表がぬかるみ、その上を人やバックホウなどが動いたため泥沼化し、ひざまで沈むありさまであった。そのため、鉄板を鋼矢板の周間に敷くなどして対処してきたが、人や機械が

ひんぱんに動きまわる場所では、鉄板が沈んだり滑ったりして十分効果をはたしえなかった。そこで、人や機械の最もよく動く場所——泥沼化してしまった場所であるが、そこに地盤改良剤（大阪セメント E S C N o 1 9 5 3）を使用し、作業に支障のないよう地表面を硬化させた。地盤改良剤使用後は、軟弱地盤による作業上の障害はいちおう解決した。

（発掘調査） 発掘調査は、鋼矢板内の切梁りの位置に「キ」の字型に畦を残し、5mグリッドを6カ所設定して開始した。排土は、当初表土を排土板付きのバックホウで除去し、その後ベルトコンベアでトレント外に土砂を出す予定であったが、トレントが狭かったためバックホウを鋼矢板の外側に置き、アームをトレント内に伸してバケットに土砂を入れてはトレント外に出した。

下層部の調査は、切梁りを入れて後、まずトレント南側で5m×10mの範囲で掘下げを始める。土層を記録、検討しながら主にバックホウで土を上げて行ったが、砂層を除去した地表下約3mの深さで、古墳時代以前に埋没した旧内湖か沼地が確認されたため調査を終了した。湧水は、上層よりも多かった。トレント内の砂層壁面が崩れやすく、垂直に壁面を削りにくかった以外大きな支障はなかった。

## 2. その他

調査の内、土留鋼矢板の設置及び発掘調査作業（機械、作業員等の提供）については、設計書、図面、発掘仕様書を提示し、11月18日に指名競争入札し、東洋建設株式会社に再委託した。

また、本年度の試験調査の性格から、概要報告書を刊行し、調査結果を資料化すべく努めた。

### 第3章 試験調査の結果と問題点

今回の試験調査の課題は、これまで発掘調査が比較的難しいとされてきた低湿地における調査方法とその効率性についてであった。その意味では、やや小面積ではあったが、鋼矢板の使用によって調査面をドライな状態に保つことができた。また、従来の方法では見落しがちな、遺構の色が薄いピットなども容易に検出することができた。鋼矢板の縫切りで予想外の効果は、新旭町の湿地の上層が、水さえ含まなければ硬度があるものの、いったん水を含んで融ぜられてしまうとヘドロ状になるため、堅面の流れ落ちが多く、人手がその堆土にかかりきりになってしまうのを完全に防いだことである。そのため、作業員は、計画された発掘作業に専従でき、調査が能率良く進められたことである。今回、予想しなかった積雪とその解けた水で、レンチの外周が泥沼化したが、これも鋼矢板がレンチ内への流込みを防止している。

新たに生じた問題点は、地表面が予想以上に柔かいことで、調査の準備段階でブルドーザーが湿地にめりこんだり、鋼矢板外周で作業のために人や機械が動きまわると、人のヒザぐらいまで沈む泥沼となることで、これが作業の最大の支障となった。現場での解決策としては、進入路に土砂を敷き、また地盤改良剤などを使用した。今後の調査では、まず進入路の確保が、各種資材や機械の搬入にぜひとも必要である。

遺物の取扱いで今後問題となるのは、木製品や自然木等についてである。今回の調査では、浅い溝であるにもかかわらず、約350点以上にのぼる木製品や自然木が出土しており、今後発掘面積が広くなればなるほど本遺跡群ではその数は膨大なものになると推定される。木製品は、土中に長期間埋っていたため、軟弱な場合が多く、取上げに補強を要する場合も生じよう。また、取上げ後乾燥すると破損することなどから、保存処置を施す必要があろう。また、種子等その他の自然遺物や、樹種の同定など専門分野の協力を得ねばならないものも多い。今回は、発掘調査終了から整理作業までの期間も短かったため、この点については十分対応していないが、次回からの課題となろう。

## 第4章 遺跡をとりまく環境

### 1. 地理的環境

新旭町の平野部や湖岸に所在する遺跡について考える場合、安曇川下流左岸の地形的環境をまず把握しておく必要があろう。

高島平野は、主として北は安曇川、南は鴨川の沖積作用によって形成されたもので、高島郡新旭町、安曇川町、高島町の三町にまたがる湖西最大の沖積平野である。琵琶湖の西岸は、比良断層崖が急斜面で湖にせまるため、東岸のように大規模なデルタはほとんど展開されていないが、その中にあって、高島平野のみが例外的な位置を占めている。<sup>⑧</sup>

さて、高島平野は地形的には、半径約5.5km、平均勾配5%（<sup>メーリ</sup>）の円弧状デルタファンのタイプに属している。<sup>⑨</sup> 安曇川下流域左岸における扇状地と三角州面の境界は、新旭町の五十川から、田井、針江、薬園、太田（上流部）の各集落を結ぶ標高87.5mの等高線がほぼそれに該当する。扇状地面には、現安曇川の河道沿いに、旧安曇川の乱流の跡が残っており、地下30～55cm以下は砂礫層で、安曇川の氾濫を雄弁に物語っている。三角州面と湖水との境界には、湖岸線に沿って小規模な浜堤が形成されており、浜堤の内側はラグーンおよびバックマーシュ地帯をなしている。この地帯は、湖に流れ込む大小河川や湖水の氾濫、冠水が頻繁におこることから、これに対処するため、深溝の湖岸には長さ約2kmにおよぶ大堤が築かれ、また畠植や舟刈りなどの民俗もそういった場所での苦い体験から生み出されたものである。<sup>⑩</sup> しかし、こうした湖岸線の景観も、十拓、宅地造成、湖岸堤工事によって大きく変貌をとげている。

土壤は、川原市、新庄、薬園、太田などの集落が立地する扇状地面では、上流部から下流部にむかって、礫層土壤 → 砂質土壤 → 強グライ土壤へと変化して行く。この一帯は先にも見たように、地下30～55cm以下は安曇川の氾濫による砂礫層である。一方、これより内陸部の扇状地面は、地下水位も低く灰褐色土壤が卓越している。田井、森、針江、霜降、山形の集落が立地する三角州面では、グライ土壤、強グライ土壤で、地下水位が高く地下35～65cmも掘ると地下水が湧き出す。湖岸線沿いの地帯は、田井川下流域から深溝集落北部にかけてスクモとよばれる泥炭質土壤で、これより以南、安曇川の河口に至るまでの間が強グライ土壤である。<sup>⑪</sup>

## 2. 周辺の遺跡

安曇川左岸の新旭町平野部では、その北半部に遺跡が集中する。湖岸線には、田井川以南の浜汀から湖中の浅瀬に、弥生時代後期～古墳時代中期を主とする遺物の散布<sup>⑩</sup>が認められる。遺跡は北から森浜遺跡、針江浜遺跡、深溝浜遺跡、外ヶ浜遺跡が約3.8kmにわたって連続する。このうち発掘調査の実施された森浜遺跡では、古墳時代前～中期の土器、木器が多数出土しており、中でも三点の琴と一点の琴柱は注目される。<sup>⑪</sup>また、発火具の出土も多く火鑓円10点、火鑓杵3点は、一遺跡からの出土数としては多いものである。<sup>⑫</sup>

湖岸の遺跡群より約250～500mほど内陸に、針江を中心とする遺跡群が所在する。この遺跡群は、田井川より南に、北から順に旭遺跡、針江川北遺跡、針江北遺跡、針江中遺跡と続き、針江大川を挟んでさらに針江南遺跡、正伝寺南遺跡などが所在する。<sup>⑬</sup>各遺跡とも時代的に複合しているが、針江南遺跡で弥生時代中期前半、正伝寺南遺跡で中期後半の土器が出土しておりこれが本遺跡群中の早い時期のものである。各遺跡の中心的な時期は、弥生時代後期～古墳時代前期にかけてで、湖岸線の遺跡形成とほぼ期を一にする。中でも針江川北遺跡では、弥生時代後期の1間×3間の掘立柱建物<sup>⑭</sup>が検出されている。また、各遺跡とも上層に奈良～平安時代の造構や遺物、わずかではあるが中世の土器などが認められる。針江南遺跡の東側に隣接する深溝条里遺跡でも、平安時代の土器や埋没畦畔などが発見されている。中世の遺跡としては、旭遺跡に一部重複して吉武城遺跡があり、また時期や性格の不明な円若寺遺跡などがあげられる。

平野部の南半では、安曇川の氾濫原のためか遺跡の分布は激減する。湖岸線には安曇川町との境界付近に源氏浜遺跡の散布地が認められるのみで、他に薬園に智善院遺跡、太田の仁和寺遺跡などの寺院伝承地と中世の新庄城遺跡が知られている。<sup>⑮</sup>

以上見てきた遺跡よりもやや標高の高い90mライン上には、堀川を中心として、堀川遺跡や下花貝遺跡があり、弥生時代後期～平安時代の集落跡として知られている。<sup>⑯</sup>

## 3. 位 置

今回、試掘調査を実施した旭遺跡は、針江遺跡群の最も北にあたり、調査地点は新旭町旭字葦塚で、近接して字城ノ下があり吉武城遺跡と接している。また、湖中に浅

瀬が伸び、その上から浜辺にかけて立地する森浜遺跡とも、北北東約500mときわめて近い距離にある。

調査地点付近は湿地で排水が悪く、地盤は柔かく試験調査には最適な条件であった。

## 第5章 調査日誌(抄)

11月23日(月) 曇り

器材の搬入を行い、調査を開始する。調査区は非常に軟弱化しており、排溝を兼ねてトレンチの内外に排水用の側溝を掘る。

11月24日(火) 晴れ

土層観察用の「キ」の字型の畦を設定し、約5m四方のグリッド6か所に区分する。A～Cグリッドの表土を掘下げる。

11月25日(水) 晴れ

D～Fグリッドの表土を掘下げる、精査する。

11月26日(木) 曇り

第II層(暗青灰色粘質土層)を掘下げる。各グリッドとも遺物の包含は認められない。

11月28日(土) 曇り

A・Bグリッドにおいて、第III層(黒褐色粘質土層)の掘下げを行う。土器・木製品・自然本などが出上した。

11月30日(月) 晴れ

C・Dグリッドにおいて、第III層の掘下げを行う。Cグリッドでは、次の第IV層(青灰色細砂層)の上面に、土器と木製品の堆積が検出された。

12月1日(火) 晴れ

E・Fグリッドにおいて、第III層の掘下げを行う。湧水が激しくなったため、Fグリッドの北端に排水用の側溝を掘る。

12月2日(水) 雪

第III層(黒褐色粘質土層)までの掘削を終えたところで、「キ」の字型の畦の断面を実

測し、畦の取りはずしを行う。A-Bグリッド間の畦を取る際に、第III層中より大形の高杯の杯部が、ほぼ完全な状態で出土した(図版6-1)。

12月3日(木) 雪のち晴れ

第IV層(青灰色細砂層)の上面を調査する。トレンチの東北隅から西南方向に延びる幅約2mの溝状造構が検出された。これを以後SD-1と呼称する。



第3図 調査風景

12月4日(金) 曇り

SD-1の確認状況の写真を撮影する。これに際しては、トレンチ北隣に3段の撮影用のやぐらを設置し、以後、全景写真の撮影に関しては、同位置より行う。

SD-1の中に堆積している黒褐色土層を掘り始める。

トレンチ周囲の地盤が、雪解によって非常に軟弱化しており、トレンチを大きく取り開む排水溝を掘る。

12月5日（土） 晴れ

SD-1の掘削を引き続き行う。溝内の層位の堆積は単層で、スクモ混じりの黒褐色土層である。SD-1からは、木製品や自然木などが非常に多く検出され、出土状況の平面実測を行う。



第4図 軟弱化したトレーナ周囲

12月6日（日） 曇り

トレーナ周囲の地表は排水溝を掘った後もなお、軟弱化しており、バックホウやブルドーザーによる作業にも支障をきたしましたため、地盤改良剤を使用し地盤を強化した。

木製品や自然木など出土状況の写真撮影を行う。

12月7日（月） 曇り一時雨

木製品や自然木を実測し、順次、取り上げを行う。約350点に及ぶ。

12月8日（火） 曇り

SD-1の掘削を終了する。溝の深さは浅く、約10~20cm程度であった。SD-1の横で、土坑とビットが検出され、精査を行う。完掘後に全景写真を撮影する。

12月9日（水） 雨のち曇り

前日に引き続き、断面図実測。

12月11日（金） 晴れ

Aグリッド・Dグリッドの位置で掘下げを始める。地表下1mのところで、流木の溜り

が確認された。これは青灰色の砂層中にブロック状に入り混んでおり、木製品や土器を含まない。

地表下3mのところで粘質砂層を検出し、3.5mまで層位を確認し、青灰色砂層以下では遺構・遺物の無いことが判明した。

12月12日（土） 晴れ

B・C・E・Fグリッドにおいて、流木の溜りを検出する。

12月13日（日）～12月17日（木）

降雪のため、発掘作業は不可能となり、室内で遺物整理及び図面整理などを行う。

同時に、現場再開に向けて除雪・排水作業を行った。



第5図 トレーナ内排水風景

12月18日（金） 曇り

除雪・排水作業を行い、現場を再開する。流木の溜りはトレーナの中ほどに始まり、東側へ傾斜して確認された。

12月19日（土） 曇り一時雨

流木の溜りを検出し、写真撮影。流木を取り上げ、調査を終了する（図版9）。

12月23日（水） 曇り

矢板内埋め戻し作業完了。

## 第6章 調査の所見

### 1. 層位

調査地点は水田であり、試掘調査における第61トレンチを含む。トレンチの一部（Bグリッド）は上層で試掘時の搅乱を受けていたが、他は、ほぼ同一の水平堆積であった。

標 尺 m	深 度 m	層 厚 m	柱 状 図	色 調	地 質 名	観 察
	0.75	0.75		暗 純	表 土	
1						含水大。崩れ易い。 上部小礫混入。 全体に腐植物混入。
2						
3	2.80	2.05			シルト質土	含水中、腐植物混入。
	3.10	0.30		暗 灰	泥炭シルト	
	3.55	0.45		暗 灰	砂質シルト	腐植物混入。
4						含水大。 礫は径2~30mm級を主体としている。
5						
6						
7	7.20	3.65		暗 灰 砂 積		
	7.90	0.70		暗 灰	シルト	砂分少量混じる。 含水少~中位。
8	8.35	0.45		暗 灰	シルト質砂	含水中。
9						10.15~10.30m間、粗砂を夾在する。
10						
11						
12	12.00	3.65		暗 灰 砂 積		

第6図 調査地付近地質柱状図

基本層序は、第Ⅰ層・暗茶灰色粘質土層（耕作土）、第Ⅱ層・暗青灰色粘質土層、第Ⅲ層・黒褐色粘質土層、第Ⅳ層・青灰色細砂層である。

第Ⅰ層の耕作土は、約15cmの厚さである。

第Ⅱ層は、約20cmの厚さであり、ほぼ水平な堆積を示す。

第Ⅲ層は、スクモ混じりの粘質土層で、約10cmの厚みを保つ。この層中には、古墳時代前～中期（庄内式～布留式）の古式土師器が混在しており、また木製品や自然木も多数包含されている。

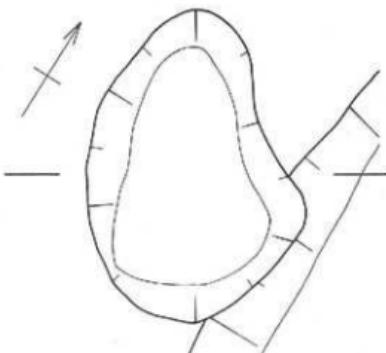
第Ⅳ層以下は、1.2mまで青灰色の砂層が続き、その中に流木を含む淡黄褐色の粘質土層がブロック状に入る。この下は3mまでが砂礫層であり、次の灰褐色粘質砂層へと続く。この粘質砂層中には巻貝の遺体が認められる。第Ⅳ層以下には、遺物は包含せず、遺構も確認されなかった。

## 2. 遺構

本調査において検出された遺構は、土坑・ピット・溝であった。

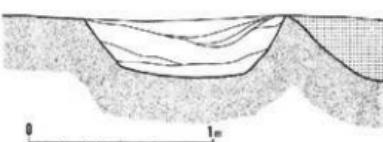
### 土坑（SK-1）

土坑はトレンチの南端で検出されたもので、SD-1を切込んでいる。おそらく上層から掘込まれる遺構であると思われる。大きさは、南北約1.7m、東西約1.2mの楕円形を呈しており、深さは約40cm程で、遺構内から土器の出土は見られなかった。



### ピット（Pit-1）

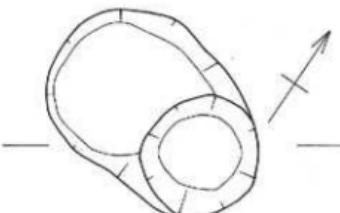
直径60cmの円形のピットは、隣接する浅い落ちこみを切込んでいる。この遺構は第Ⅳ層（青灰色細砂層）の上面で初めて検出されたものである。ピット内の土層は、西側から押された粘質



第7図 土坑（SK-1）実測図

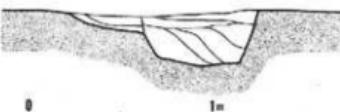
土層が、順次堆積したものである。

遺物は土器の小破片が数点出土しており、第Ⅲ層（黒褐色粘質土層）中で見られる土器と同じ時期の古式土師器である。

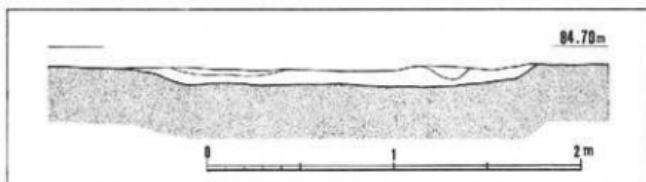


### 溝 (SD-1)

トレンチを斜めに横切る溝も、ピット1と同様に第Ⅳ層（青灰色細砂層）の上面で検出された。溝はトレンチの西南部から東北方向にまっすぐ延び、北端で西へ折れる。溝の幅は約2m程で、南に行くほど広くなり、約4m近くになる。深さは10~20cm程度で、溝内の堆積はスクモ混じりの黒褐色土層のみである。この溝には、350点以上の木製品及び自然木と土器が含まれる。このうちの土器は、古墳時代前~中期の古式土師器（庄内式~布留式）で、その内で最も新しいものは、布留式土器の壺である。溝内部には、本来、水が流れていたものと考えられるが、溝の基底部や木製品の堆積状況の水準高が、トレンチ内では、ほぼ同一であり、流れの方向は断定できなかった。



第8図 ピット (Pit-1) 実測図



第9図 溝 (SD-1) 断面図

## 第7章 出土遺物

### 1. 土器

庄内式・布留式の両時期の古式土師器が、第Ⅲ層（黒褐色粘質土層）、ピット1、SD-1から出土している。

**壺** 二重口縁をもつもの、外弯気味に聞く口縁部を持つもの、内弯気味に上方へ延びる口縁を持つものの3種類ある。

二重口縁の壺（2）は、上半分が剝離し、欠損しているが、擬口縁部を残している。内・外面ともに、ハケ目調整が施されている。その外面には、沈線等の装飾は認められない。

外弯気味に聞く口縁を持つ壺（1）は、口縁端部をナデ調整によって終えており、面を持つ。内・外面ともに粗雑なヘラ磨きが施されている。

（4）は、内弯気味に上方へ延びる口縁部を持つもので、端部をわずかに外方へつまみ上げている。胴部は欠損しているが、おそらく扁平な球型のものが伴うと考えられる。

また、この他に二条の沈線を持つ幅広い口縁帯を持つもの（3）などがある。

壺は各1個体ずつの出土であり、全体の出土量から見て、壺の示める割合は少ない。

**小型壺** （17）は、口径11.0cm、胴部の最大径11.8cmを測り、口径の方が小さいものである。体部下半は欠損しているが、球形な底部を持つと考えられる。口縁部は斜上方にまっすぐ伸びる。頸部外面にはハケ目調整が施され、体部内面には横方向のヘラ削りが施される。1個体の出土である。

**甕** 大別して「く」の字状に外反した口縁を持つもの、受け口状の口縁を持つもの、口縁部が高く立ち上がるものの3種類ある。

「く」の字状口縁を持つものには、8種類認められ、

1、外面に粗い右上がりの叩きを持つもの（5）で、直接畿内第5様式の系譜をひくものと考えられる。内面の調整は、くびれ部の上に粗いハケ調整が施されており、下に細かいハケ調整が施される。

2、庄内式の甕である。鋭く外反する口縁部を持ち、端部は小さくつまみ上げられる（45）。体部外面には右上がりの細かい叩きが施されており（46・47）、内面はヘラ

削りを受けて、器壁を非常に薄く仕上げられている。色調は暗茶褐色のいわゆるチョコレート色を呈しており、胎土中には金雲母を含んでいるが、角閃石は含まれていない。

3、器壁が非常に薄く、鋭く屈折する口縁を持つもので、口縁端部はわずかに外方へつまみ出されている（6）。外面にはハケ目調整が施されており、体部内面はヘラ削りを受けている。口縁部内面には、細かい「叩き目」を連想させるようなハケ調整が施されている。色調は黒褐色を呈しており、1個体の出土である。

4、器種が内厚で、口縁端部に面を持ち、くびれ部が鋭く屈折するものである（7）。外面と口縁部内面にはハケ目調整が施され、体部内面は口縁部のくびれ部までヘラ削りされている。

5、ゆるく外反する口縁を持つもので、口縁部と体部との接合部内面に鋭さが全くない（8）。口縁端部は外方につまみ出されており、上方に面を持つ。内・外面とともに粗いハケ調整が施される。

6、口縁部と体部の接合部の内面を肥厚させたもので、口縁端部が丸味を帯びるものである（9）。内・外面ともにハケ目調整が施されている。

7、体部内面を肥厚させる土器で、口縁端部を内側につまみ出す布留式の甌である（11）。外面はハケ調整を施されており、頸部直下では横方向のナデ調整である。体部内面のヘラ削りは頸部よりも下の方で見られなくなり、頸部内面の器壁は肥厚している。

8、斜め上方に伸びる口縁が、外面に稜を持つものである（13）。口縁端部は水平な面を持つ。

屈曲した後、高く立ちあがる口縁を掩つ甌（16）は、まっすぐ斜上方へ伸ばす口縁の端部を丸く終わる。球型を呈する体部の外面はハケ調整が施されており、内面はヘラ削りされ、非常に薄い器壁を持つものである。口縁部はナデ調整されており、外面に擬凹線等の装飾を見ることはできない。

受け口状口縁を持つものは、近江で普遍的に見られる形態を示しており、屈曲した頸部が外面に頸をつくり、外反気味に立ち上がる（14・15）。口縁部先端は水平の平坦面をつくり、外方へ大きくなつまみ出されている。外面には、斜刺突列点、沈線、棒状浮文等の手法が認められず、この形態のものの中では、比較的新しい時期のもので

あると考えられる。

**小型壺** 口径と脚部最大径が、ほぼ等しい小型の壺である（18）。「く」の字に屈曲する頸部の内面は肥厚しており、まっすぐに伸びる口縁部は先端で丸く終わる。外面には粗いハケ調整が、口縁部内面には細かいハケ調整が施される。

**高杯** 高杯には杯底部に稜のつくものと、稜のないものがある。

前者は、直線的に外開きに伸びた杯底部が外面に稜をなし、外上方へまっすぐ伸びるものである（23）。内面にはヘラ磨きの手法が見られる。また、別個体で口縁部に外傾する端面をもつもの（22）も、稜を持つ高杯に含まれよう。

後者には、口径15cmを測るものから、22cmを測る大形のものまである。

口縁端部の形態は、銳く終わるもの（25）、外方にわずかに折れ曲がるもの（20）、さらに上端部に平端な面を持つもの（21）がある。

脚柱部は、中実しているもの（27・28・29）と、杯部に脚部を接合しているもの（30・31・32）、さらに、杯底部を充填しているもの（44）がある。脚柱部が中実しているものには、すべて3方透しの穿孔がある。肉厚の脚部の中には、杯部との接合部で4cmの外径を測るもの（26）がある。

大形の高杯は杯部のみの出土で、完形品である（24）。やや内弯気味に立ち上がる口縁部を持ち、内・外面ともにヘラ磨きが施されている。

**器台** くびれ部を中位上方に持ち、上・下方にはほぼ対称に外反し、受部と脚部を形成するもの（33・34）と、皿状の受部を持つもの（35）がある。

（33）は、口縁部外面に波状文を持ち、棒状浮文がつけられる。（34）は、口径9.0cmを測る小型器台で、内・外面ともにヘラ磨きを受ける。

（35）は、しっかりとした立ち上がりを示す皿状の受部を持ち、脚部との間を貫通しない小型の器台である。受部の内・外面には、密なヘラ磨きが施される。脚部は欠損しているが、ほぼ直線的に伸びるのが付くと考えられる。あるいは、小型高杯になるかとも考えられる。

**ミニチュア土器** 底径4.0cmを測るもの（36）が1点だけ出土している。平らな底部と、やや内弯気味に斜め上方に伸びる体部とからなる。おそらく器高10cm前後の小型壺に近いものになると思われる。

**底部** 壺・壺類の底部には、平底のもの（38・39・40）と、上げ底のもの（41・

42・43) とがある。また、体部外面に叩き目を持つ壺の底部があり(37)、外方に開く立ち上がりを示す。

## 2. 木製品

溝(SD-1)と第Ⅲ層(黒褐色粘質土)から木製品や木片が出土したが、中でも溝からは350点以上にのぼる木製品や自然木が検出された。しかし、今回の出土品のうち、原形をとどめていたり、旧状を推定できる木製品はきわめて少なかった。ここでは、ある程度原形や旧状の推定できるものと、加工の顯著なものに限って紹介する。

用途の明らかなものとして、まず2点の火鑽臼(1、2)があげられる。共に端部を斜めに切落した形状をしており、同様な例は森浜遺跡でも1例ある。(3)は、切断した丸太の両端を整形して中央に溝を一周つけた木鉤で、渡辺誠氏の分類するIYD型「もじり編み用の木製鉤」である。<sup>(3)</sup>(4)は腐食が著しい破片であるが、かろうじてその形態から四足盤の一部分と推定される。盤は、森浜遺跡針江遺跡群において、これまでにもよく出土している。(5)のかづらをもった枝は両端部が欠失しているが、一方の端に削り跡が認められることから、両端を丸く合せて結ぶ輪桿と思われる。ただ、森浜遺跡や針江川北遺跡の出土例や、高島郡マキノ町蛭口での実例などから、田下駄の足板に組合せる輪桿と考えるのが地形からみて妥当であろう。

組合せ部材には、端部を丸く削出し、端部寄りに一孔納穴をあけたもの(6)があるが用途は判らない。

棒材は長短各種の長さのものがある。端部も丸く削出したもの(7、8)や、丸味をもたせただけのもの(9)、斜めに削り先端のみ丸味をえたもの(10)などさまざまである。それぞれ用途は不明であるが、(7)のように端部を丸く削出した棒材が、森浜遺跡出土の組物(第1図)には軸に使われていた。

板材は、加工痕の明確なものの代表例として示した。(11)は、整形した先端の側縁辺の削りが、内側にくいくむようにややカーブする。(14、15)には、表面に手斧の加工痕が残る。(16)は、薄く幅の狭い板材の中心に小孔を間隔をおいて穿ったもので、両端を欠失する。小孔はその大きさから、糸などを通したものと思われるが、現在のところ使用痕等が見られず確証はなく、用途も不明である。(17)は、板材の角を斜めに切落し、角に穿孔したものである。これも用途は判らない。

第III層中からは、下面にやや反りのある、握りを持つ板（18）や、両端付近に浅い窪みを加工した組合せ部材（19）、札状の小さな板の四隅に小孔をあけた用途不明のもの（20）などがある。また、耕作土中から曲物の底板（21）が出土している。

木製品の年代は、共伴する土器から考えて、曲物以外は古墳時代中期、もし仮に遅りうるものがあったとしても古墳時代前期までのものであろう。曲物の底板は、出土層位から時期不明としか言いようがないが、吉武城の堀に近接することなどから、あるいは中世にまで遡る可能性もある。

なお出土した木製品について、樹種の鑑定は実施していない。今後の調査では、こうした点にも留意したい。

## 第8章 要　　説

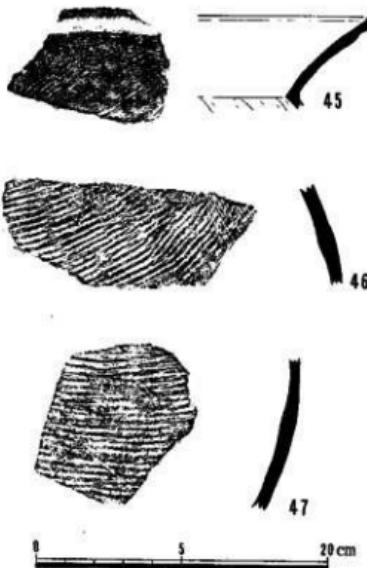
今回の発掘調査をまとめるにあたって、気付いた点を2、3あげて結びとしたい。

**1. 遺構・土層のまとめ**　まず遺構から見ていくと、溝（SD-1）は、トレーニング内での溝の底の比高差、木製品や自然木の接地面の比高差に大差なく、溝をも含めた包含層の堆積状況などから考えて、流れのよどんだ自然流路と堆定される。周辺の地形や土質状況などから考えると、沼澤地に近い位置かもしれない。また、遺物の年代（庄内式～布留式）および両時期の土器が混在して出土する状況など、すぐ北東の浜河上にある森浜遺跡ともよく似ており、相互の関係が注目される。森浜遺跡と旭遺跡が、その位置関係から互いに機能的に関連する一連の遺跡なのか、それとも、別個に二つの性格の異なる遺跡が併存していたものなのか、今後の調査が何らかの回答を与えてくれよう。下層については、地表下約3mほどで沼地と思われる粘質土層が確認されている。沼と考える理由は、土質と食物遺体の遺存状況などから判断している。植物遺体の出土状況は、いわゆるスクモ層ではなく、層中に化石のように封入されている。またこの層には、層の土色よりも白っぽい泥の粒が含まれる。これは、新旭町に限らず湖南東部の湿地の遺跡でも認められ、注意すれば県下各所で確認できよう。その正体は、かって守山市服部遺跡調査中に泥粒にわずかに茶色をした巻貝の殻の一部が付着したものがあった。このことから泥粒は、巻貝の死骸に泥が入り、化石でいう内型（殻がとけ去って型だけになったもの）になったものである。ただ化石より崩

れやすく、また内型に殻の内側の様相が印されていないため、現在のところ種類の判別はできない。今後、卷貝の種類が判別できるなら、どのような状態の泥地に生息するか当時の環境を知る手がかりとなろう。さて、この沼は、調査地北東の新川舟溜り（森浜遺跡）の沖合30～40mに内陸方向への落込みがあり、本地点まで続くのであるなら規模からいって内湖とよぶべきものであろう。また、この内湖が古墳時代以前に存在していたことは、森浜遺跡と崩壊跡の調査で合致する。<sup>◎</sup> ただ、内湖が埋まっていく過程は各々の土層の堆積が異なることから場所によって違うようである。今回のトレンチの土層から見ると、沼の粘質土層の上に、厚い砂礫層が堆積していることから、河川の氾濫によって運ばれた土砂が内湖の内陸部側から急速に埋立てを始めている。ただ、砂礫層と遺構面までの間に流木を含む層があることは、内湖が埋まりながらも長く湿地として残っていたことを物語る。遺構面についても、一部土器が下層の上面から出土しており、湿地の泥中に自重で沈下したとしか理解できず、軟弱な地盤であったと推定されるのである。

## 2. 土器の年代 土器の時期について

見ると、庄内式と布留式の二時期に大別でき、典型的なものをあげると、庄内式には、甕（45、46、47、6）、壺（1）、高杯（23、24）、器台（33）などがあげられよう。中でも小破片であるが（46、47）の甕は、体部外表面に細かい叩き目を施し、内面をヘラ削りし、胎土に金雲母を含み、チョコレート色の色調を呈する典型的な庄内甕のものである。この甕については、完形品に近いものが森浜遺跡<sup>◎</sup> でも出土しており、搬入品であることはまちがいないが、角閃石を胎土に含まないことから河内地方—生駒山西麓地域のものではないとされているが、おそらく産地は畿内に求められるものであろう。



第10図 庄内式土器（甕）実測図

粗い叩き目を施す、突出した底部をもつ壺（37）は、破片の残り具合からみて、胴部はかなり丸味をおび、おそらく最大径が肩部より下半にくるもので、形態的にも弥生時代後期の土器の中に見られる叩き目を施す壺よりも後出的なものである。この壺も近江の在地的なものではなく、搬入品かあるいはこの種の壺が近江の中の特定な地域で作られていると考えている。受け口状口縁をもつ壺（14）は在地のものであるが、口縁部には装飾がなく、口縁端部も外方へ水平に伸び、第V様式のものと比較すると変化が著しい。最近の県下の趨勢としては、第V様式以降の受け口状口縁の変化を、装飾の面からは、刺突列点文 → 沈線・棒状浮文 → 無文化、口縁の形態も受け口が直立しているものから、しだいにS字化して端部が外方へ伸びてゆくなど進化論的に流れがとらえられてきた。しかし、その年代について、口縁部の装飾の変化のみをもって、単純に庄内式 → 布留式（早い段階）と図式化できるかどうか疑問の余地がある。ことに口縁部の無文化のみをもって布留式とする点については必ずしも賛同できない。無文の受け口状口縁を布留式併行期に求めたのは、長浜市鴨田遺跡が最初であり<sup>⑩</sup>、この壺の形態を観察すると、底部は完全な丸底となり、胴部の装飾も完全に無くなっている。一方、旭遺跡出土例の場合、口縁部は無文化しているが、同一個体の胴部の破片をみると、肩にクシ描平行線（14）が施されている。また、体部の形態は肩が張り、胴部下半は完全に丸底化しておらず、明らかに布留式併行のものより古朴を呈しており、あるいは庄内式の非常に新しい段階に属するものかもしれない。

壺の内には弥生時代後期にみられるような長頸壺や端部を下方に垂下させたような壺はみられないが、後期の壺の流れをひくもので、外面に装飾を持たない単純に外反する口縁を持つ壺（1）と底部（40）がある。高杯の中には大形のものと小形のものがある。（23）は杯底部が外面に稜をなし、外方にまっすぐ伸びるもので、杯部内面がほぼ水平で、たちあがりの厚いのが特徴としてあげられる。これら調整・手法は、布留式のものでは、調整の主流がヨコナデ化していくのに対し、それよりも先行する前段階の特徴を示すものとされよう。器台は、野洲郡野洲町久野部遺跡で見られるような弥生時代後期の器台とは異なり、くびれ部を中位上方に持ち、上・下方には対称的に外反するもので、草津市片岡遺跡で見られるような近江の弥生時代末期～庄内式期に認められるものである。（33）は、口縁端部外面に波状文と棒状浮文を持ち、無文化した（34）にやや先行するものかとも考えられる。

この他、庄内式期の土器の一群中に含まれると思われる搬入品の土器がある。(6) の甕は湖北地方でも量的には少ないが出土例が知られており、現在のところ近江のものとは考えがたい。(16) の甕は、日本海側の土器の影響下のものと思われる。(4) の壺は、搬入品である可能性を持つ。

次に布留式には、甕(11、18)、壺(2、17)、高杯(20、21)、器台(35)などがあげられる。中でも最も布留式の特色を示すものとしては、口縁端部内面が肥厚し、体部内面がヘラ削りされ、底部丸底の甕(11)と小型壺(甕?) (17)があげられる。

(18)は、器型・手法上の特徴が大形の甕とはほとんど同じものであり、外面に煤の付着が認められ、大形の甕と同様に、煮沸形態を示すものであろう。大阪府高槻市安満遺跡の井戸2における布留式土器の一群中にも、煤の付着した同種のものがある。同遺跡の中では小型壺として分類されているが、成形技法と機能が壺と同じものとされていることなどから、むしろ小型甕として考えたい。(2)は二重口縁の壺で球形か卵形の体部を持つものである。これは口縁の屈曲部がわずかに下方に突出し、外面には何の装飾も持たないものである。小型壺(17)は形態的には、口径が体部最大径をわずかに下回っており、野洲郡野洲町下横子遺跡や長浜市高田遺跡において出土する小型壺の中にも、同様なものが認められる。小型器台(35)は皿状の受部が付くもので、布留式に顕著に認められ、小型丸底壺とセットになるものである。この時期の皿状の受部を持つ器台には、口縁部がやや垂直気味に立ちあがるものと、小さく外上に伸びるものとの二形態があるが、旭遺跡では前者の出土しか見られない。

現在、湖西北部において布留式土器を出土する遺跡としては、今津町心妙寺遺跡<sup>①</sup>、新旭町森浜遺跡、安曇川町南市東遺跡等が知られている。各遺跡についてみると、南市東遺跡では初期須恵器を伴い、また心妙寺遺跡では須恵器を伴わないが布留式の新しい様相を示している。旭遺跡はこれらの二遺跡よりも、甕等に古い要素が認められ、あるいは先行するものであるかも知れない。

近江における布留式土器の研究は、ようやく途についたところであり、旭遺跡の場合も出土状況から考えると良好な状態ではなく、今後の課題としたい。

#### ＜注＞

① 三上貞二「滋賀県新旭町針江弥生遺跡について」(『史想』第9号、紫苑史学会、昭和33年)

② 福岡澄男ほか「国道161号線・高島バイパス遺跡分布調査概要報告書」(滋賀県教育委員会)

会、昭和46年)

- ③ 囲司高志・兼康保明『針江遺跡群試掘調査概要』(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和56年)

兼康保明・岡司高志・宮崎幹也・尾崎好則『正伝寺南遺跡・新庄城遺跡試掘調査概要』(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和57年)

- ④ 昭和49年、滋賀県教育委員会調査。

⑤ 兼康保明「よろがえる湖西の古代—水没した森浜遺跡を追って—」(『湖国と文化』第3号、滋賀県文化体育振興事業団、昭和53年)

- ⑥ 岡司高志・兼康保明『針江遺跡群試掘調査概要』(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和56年)

⑦ 昭和56年4月～8月。昭和57年1月～6月(予定)。滋賀県教育委員会調査。

⑧ 地形環境については、福田徹氏の研究成果を引用した。記してその学恩に謝意を表したい。  
福田徹「安養川下流域における条里制の復元」(『人文地理』26-3、昭和49年)

福田徹「中世後期における村落基盤の復原」(『龍谷史壇』73・74、龍谷大学史学会、昭和53年)

⑨ 水山高幸・池田慎・大橋健「琵琶湖周辺の地形」(『琵琶湖国定公園学術調査報告書』、滋賀県、昭和46年)

⑩ 豊庭昌哉「水とのたかく(藤本太郎兵衛のことども)」(『近江』3、近江考古学研究会、昭和48年)

大堤の築堤時期は不明であるが、元文2年(1739)の古地図には記入されているという。

⑪ 兼康保明・岡司高志・宮崎幹也・尾崎好則『正伝寺南遺跡・新庄城遺跡試掘調査概要』(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和57年)

氾濫原の砂礫層は、昭和56年度の試掘調査によっても確認されており、土壤の変化する確  
降に近づくと遺跡が立地するようになる。

⑫ 滋賀県農業試験場「今津・新旭・安曇川・高島地区」土壤図、昭和39年

⑬ 「琵琶湖水没遺跡一欄表・分布図」(『近江』第3号、近江考古学研究会、昭和48年)

林博通「琵琶湖湖岸・湖底遺跡分布調査概要」(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和48年)

⑭ 訂⑮に同じ。

兼康保明・堀内宏司『森浜遺跡(新川舟溜り航路部分)発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和54年)

⑯ 兼康保明「古代の琴—森浜遺跡出土などの遺品をめぐって—」(『月刊文化財』第169号、第一法規出版、昭和52年)

水野正好「琴の誕生とその展開」(『考古学雑誌』66-1、日本考古学会、昭和55年)

⑰ 高嶋幸男・岩城正大『古代日本の発火技術—その自然科学的研究』(群羊社、昭和56年)

⑯ 訂⑮に同じ。

⑯ 岡司高志・堀内宏司・山口順子「高島郡新旭町針江遺跡」(『は堀整備関連遺跡発掘調査報告書』VI-1、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和54年)

⑰ 宮崎幹也「新庄城遺跡の調査」(『正伝寺南遺跡・新庄城遺跡試掘調査概要』、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和57年)

⑯ 中村博司ほか『滋賀県文化財調査報告書第5冊 高島郡新旭町船川遺跡調査報告』(滋賀県教育委員会、昭和50年)

新旭町教育委員会編『新旭町堀川遺跡』第2～5次発掘調査略報(新旭町教育委員会、昭和51～54年)

⑯ 渡辺誠「もじり編み用木製鍔の考古資料について」(『考古学雑誌』66-4、日本考古学会、昭和56年)

県下の出土例は、長浜市勝町遺跡、同鶴田遺跡、坂出郡米原町入江内湖西野遺跡、蒲生郡

安土町大中の湖南遺跡などで出土しており、同型式のものは、鴨田遺跡1例、入江内湖西野遺跡6例、大中の湖南遺跡1例が知られている。

⑩ 本田修平「森浜遺跡出土の田下転について」（『民俗文化』第168号、滋賀民俗学会、昭和52年）

⑪ 許<sup>⑩</sup>に同じ。

⑫ 現在のところ丸味のある粒の形態から、タニシの一類ではないかと考えている。タニシは水田などの泥地に生息し、冬は泥の中に入り越すことから、これまで土質等と考え合せて泥沢地と推定している。

⑬ 許<sup>⑩</sup>に同じ。

⑭ 本田修平・堀内宏司・奥野宗寛・折井千枝子「滋賀県下の庄内式上器——畿内より搬入された彫形土器の分布——」（『滋賀文化財だより』9、滋賀県文化財保護協会、昭和52年）

⑮ 「もちはこぼれた河内の上器」（東大阪市立郷土博物館、昭和55年） P22。

ここでは森浜遺跡例を、河内の甕を模した精巧なものが近江で作られていると考えているが、それ以降も出土例が少ないとなどから考え合せて、粗い印目を施す甕とは異り在地ではなく搬入品と理解している。この問題については、胎土分析等により明確にすべきと思われる。

⑯ 中谷雅治ほか「鴨田遺跡」（『四道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』II、滋賀県教育委員会、昭和48年）

⑰ 大橋信弥・別所健二・谷口徹「久野部遺跡発掘調査報告書——七ノ坪地区——」（滋賀県教育委員会・野洲町教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和52年）

⑲ 丸山電平・中西常雄・本田修平ほか「草津市片岡遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』III-II、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和51年）

⑳ 滋賀県文化財保護協会林純氏の御教示によると、長浜市鴨田遺跡、熊岡山西遺跡、国友遺跡、坂田郡近江町法勝寺遺跡等で同種の甕が確認されているとのことである。

㉑ 坂口克行・橋本久和「安満道路発掘調査報告書——9地区的調査——」（高槻市教育委員会、昭和52年）

㉒ 古川与志紹「野洲町下綱子遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』III-II、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和51年）

㉓ 大橋信弥・別所健二・谷口徹「野洲町下綱子遺跡E・S地区」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』IV-II、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和52年）

㉔ 宮成良佐ほか「高田遺跡調査報告書」（長浜市教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和55年）

㉕ 昭和54年に滋賀県教育委員会によって調査された。担当者であった島野泰樹氏の御厚意によって、出土遺物を実見することができた。

㉖ 中江彰『南市東遺跡発掘調査概報』（安曇川町文化財調査報告書1、安曇川町教育委員会、昭和54年）

㉗ 中江彰『南市東遺跡発掘調査概報』（安曇川町文化財調査報告書2、安曇川町教育委員会、昭和55年）

㉘ 昭和13年に「布留式土器」と呼称されて以来、形態の変化、器種の消長、技法の変化、須恵器の共伴等をもとに、さまざまな細分化が試みられている。

㉙ 原口正三・出中琢・田辺昭三・佐原真「船橋遺跡の遺物の研究」（平安学園考古学クラブ、昭和37年）

㉚ 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」（『考古学雑誌』60-2、日本考古学会、昭和48年）

㉛ 石野博信・関川尚功ほか「趣向」（桜井市教育委員会、昭和51年）

㉜ 藤井利章ほか「発志院遺跡」（奈良県教育委員会、昭和55年）

# 1. 遺物観察表 (土器)

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 (口縁部)	外肩気味に開く口縁部を持ち、端部に外傾する面を持つ。	口縁部内、外面は横方向のヘラ磨きが施される。 口縁端部は横ナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 粗 焼成 硬 残部 口縁部完存 SD-1
2	壺 (口縁部)	二重口縁を持つ壺。 直上気味に立ちあがる頸部が外反し、段を持ち、さらに斜め上方へ伸びるもの。	外面には縱方向のハケが、内面には斜め横方向のハケが施される。	色調 淡黄灰色 胎土 粗 焼成 硬 残部 1/6 黒褐色粘質土層
3	壺 (口縁部)	やや幅広い口縁帯を持つもので、外面に二条の沈線を持つ。	口縁部内面には横方向のヘラ磨きが施される。 外面ナデ調整。	色調 淡灰褐色 胎土 密 焼成 硬 残部 1/8 黒褐色粘質土層
4	壺 (口縁部)	内肩気味に上方へ伸びる口縁部を持ち、端部をわずかに外方へつまみあげている。	口縁部外面は縱方向のヘラ磨きが施される。	色調 淡赤褐色 胎土 密 焼成 硬 残部 1/6 黒褐色粘質土層
5	壺 (口縁部)	「く」の字型に外反した口縁部を持ち、端部は丸く終わる。	体部外面には右上がりの粗い叩きが施され、口縁部と体部の内面にはハケ調整が施される。	色調 淡茶褐色 胎土 やや粗 焼成 硬 残部 1/4 黒褐色粘質土層
6	壺 (口縁部)	鋭く屈折する「く」の字型の口縁部を持つ。 口縁端部は外方につまみ出される。	外面はハケ調整が施される。 口縁部内面には「叩き目」を連想させる粗いハケ調整が施される。	色調 淡茶褐色 胎土 やや粗 焼成 硬 残部 1/4 黒褐色粘質土層
7	壺 (口縁部)	「く」の字型に外反した口縁部を持ち、器壁が肥厚する。 口縁端部は外傾する面を持つ。	外面と口縁部内面にはハケ目調整が施され、体部内面は口縁部のくびれ部までヘラ削りされる。	色調 暗茶灰色 胎土 粗 焼成 硬 残部 1/4 黒褐色粘質土層
8	壺 (口縁部)	ゆるく外反する口縁部を持つもので、口縁と体部との接合部内面に段さがない。 口縁端部は外方に突出する。	内・外面ともに粗いハケ調整が施される。	色調 暗黄褐色 胎土 粗 焼成 硬 残部 1/5 黒褐色粘質土層
11 + 12 + 50	壺 (口縁部)	口縁部内面を肥厚させるもので、布留式の蓋である。 口縁部のくびれ部内面は段さを持たず、口縁部はやや内凹し、上端部は内側にふくらむ。	(11) + (12) ともに体部内面はヘラ削りされ、外面はハケ調整される。 (11) + (54) では口縁の上端部を内側へ折り曲げられている。	色調 淡赤褐色(11, 50) 淡黄褐色(12) 胎土 砂粒を含みやや粗 焼成 硬 残部 1/4 SD-1

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
9	壺 (口縁部)	「く」の字型に折れる口縁部を持つもので、器壁を肥厚させる土器であり、口縁端部は丸く終えられる。	口縁部と体部の内・外面ともにハケ調整され、口縁端部のみが横ナデ調整によっておさめられる。	色調 淡灰褐色 胎土 密 焼成 良好 残部 1/4 黒褐色粘質土層
10	壺 (口縁部)	「く」の字型に折れる口縁部を持つもので、器壁を肥厚させる土器であり、口縁端部は丸く終えられる。	口縁部はハケの後、ナデ調整される。 体部外面はハケ調整を施される。	色調 淡灰色 胎土 密 焼成 硬 残部 1/4 黒褐色粘質土層
51	壺 (体部)	口縁部内面を肥厚させるもので、布留式の壺である。	外面はハケ調整が施される。 内面は主として横方向のヘラ削りが施される。	色調 暗黄灰色 胎土 粗 焼成 硬 残部 1/8以下 SD-1
13	壺 (口縁部)	斜め上方に伸びる口縁が、外間に接をなして、上方へ伸び上端部に水平な面を持つ。 受け口の一種とも考えられる。	内面・外面ともに横ナデ調整が施される。	色調 灰褐色 胎土 密 焼成 硬 残部 1/6 黒褐色粘質土層
14 ・ 15	壺 (口頭部)	受け口状口縁を持つ壺。 屈曲した頸部が外面に顎をつくり、外反気味に立ち上がるもので、(14)は肩部に7本のクシ筋平行線をもち、器壁は非常に薄い。	(15)は体部外面をハケ調整されている。 口縁部の内・外面は横ナデ調整によって仕上げられる。	色調 淡黄褐色 胎土 砂粒を含み粗 焼成 硬 残部 1/4 (14) 1/6 (15) 黒褐色粘質土層
48 ・ 49	壺 (口頭部)	受け口状口縁を持つもの。 屈曲した頸部が外面に顎をつくり、外反気味に立ち上がる。 (52)の上端部は丸く終わる。	口縁部の調整は主として横ナデである。 頸部外面にはハケ調整がみられる。	色調 淡黄褐色 胎土 粗 焼成 硬 残部 1/8以下 黒褐色粘質土層
16	壺 (口頭部) (体部)	屈曲した後、高く立ち上がる口縁部を持ち、上端部を丸く終える。 器壁は非常に薄い。	口縁部外面は横ナデ調整。 体部外面はハケによる調整。 体部内面はヘラ削りされる。	色調 淡黄褐色 胎土 やや粗 焼成 硬 残部 1/4 黒褐色粘質土層
17	小型 壺 (口頭部) (要か?)	球型に近い体部に、斜上方に伸びる口縁部がついたもので口縁は体部最大径よりわずかに小さい。	体部中程はヘラ削りの後、ナデ調整されており、頸部にはハケが見られる。 体部内面はヘラ削りされる。	色調 淡黄灰色 胎土 やや粗 焼成 硬 残部 1/4 黒褐色粘質土層
18	小型 壺 (口縁部)	ゆるやかに外反する口縁を持つ壺で、上端部は丸く終わる。 口縁部の器壁は肥厚する。	頸部から体部にかけての外面は斜方向及び縱方向のヘラ調整が施される。 口縁部は横ナデ調整される。	色調 淡黄褐色 胎土 密 焼成 硬 残部 1/4 黒褐色粘質土層

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
19	高杯 (杯部)	杯底部に縁を持たず、外反する口縁部を持つ。	内面にハケ調査がみられ、杯底面外面はヘラ削りされ、口縁部外向はナデ調整される。	色調 淡茶褐色 胎土 やや粗 焼成 硬 残部 杯部完存 黒褐色粘質土層
20 ・ 21 ・ 25	高杯 (杯部)	斜上方に伸びる口縁部を持つ。 端部を脱く終えるもの(25)、 外方に折り曲げるもの(20、 21)があり、(21)は端部内 面に沈線を持つ。	杯部内面はいずれもハケ調査 された後、ナデ調整されてい る。 外面は横ナデ調整。	色調 黄灰色(20, 21) 淡赤褐色(25) 胎土 密 焼成 硬 残部 1/8 SD-1 (21, 25) 黒褐色粘質土層(20)
22 ・ 23	高杯 (杯部)	直線的に外開きに伸びた杯底 部が外間に縁をなし、外上方 へまっすぐ伸びるものである。 (22)は口縁端部に外傾する 面を持つ。(22)・(23)は 若干異なった形態を示す。	(22)は内・外ともに縦方 向のヘラ磨きが施される。 (23)は内・外ともに斜方 向のヘラ磨きが施される。	色調 淡赤褐色 胎土 密 焼成 硬 残部 1/8 (22) 1/4 (23) 黒褐色粘質土層
24	高杯 (杯部)	やや内窓気味に立ちあがる口 縁は上端部で丸く終わる。 底部はほぼ水平である。 山縁の一端に墨亞を持つ。	内面は下半が左上がりのヘラ 磨きで、上半が右上がりのヘ ラ磨きである。 外面は左上がりのヘラ磨き。	色調 暗黄褐色 胎土 密 焼成 硬 残部 杯部は完存 黒褐色粘質土層
26	高杯 (脚部)	器壁が肥厚する高杯である。 脚部上方2.6cmまでが中実し ている。	杯底部外面はヘラ削りされ、 上方ではヘラ磨きが見られる。 内面は磨かれている。	色調 淡灰白色 胎土 密 焼成 硬 残部 2/3 SD-1
27 ・ 28 ・ 29	高杯 (脚柱部)	大きく開く脚柱部である。 (27)、(29)は3方の円形 透孔を持ち、前者の孔径は15 mm以上を測る。 (28)は1方以上の円形透孔 を持つ。 脚柱部は中実している。	いずれも外面には縦方向のヘ ラ磨きがみられる。	色調 暗灰褐色(27, 29) 淡赤褐色(28) 胎土 密 焼成 硬 残部 脚柱部のみ完存 SD-1 (27) 黒褐色粘質土層(28, 29)
30 ・ 31 ・ 32	高杯 (脚柱部)	大きく開く脚柱部である。 直接杯部と接合されるもので ある。	外面の調整は、(30)かハケ で、(31)、(32)はナデに よって仕上げられる。 (30)、(32)の内面には粘 土しぶり痕が見られる。 (31)は横方向のヘラ削りが 内面に見られる。	色調 暗褐色(30, 31) 淡赤褐色(32) 胎土 密 焼成 硬 残部 脚柱部のみ完存 黒褐色粘質土層(30, 31) SD-1 (32)

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
44	高杯 (充填部)	杯底部の中心上方から埋められた充填部である。 (写真は下方からのもの)	板状の工具で中心上方から押しこまれている。	色調 淡黄灰色 胎土 やや粗 烧成 硬 残部 充填部のみ完存 黒褐色粘質土層
33	器台 (受部)	くびれ部を中位上方に持ち、上・下方には対称に外反するもので、端部外面に波状文と杯状浮文とが施される。	内面はたんねんに磨かれており、外面はナデによって仕上げられる。	色調 黄褐色 胎土 密 烧成 やや軟 残部 1/6 SD-1
34	器合 (受部)	(33)とはほぼ同じ器形を呈しているが、小形のものである。	内・外面ともに、縦方向のヘラ磨きが施される。	色調 淡灰白色 胎土 密 烧成 硬 残部 1/4 SD-1
35	小型器合 (受部)	皿状の受部を持ち、屈折して上方へ伸びる端部を持つ。中央の形態は不明である。	内・外面ともに、縦方向のヘラ磨きが施される。	色調 淡褐色 胎土 密 烧成 硬 残部 1/4 黒褐色粘質土層
45	臺 (口縁部)	「く」の字型に折れ曲がる口縁部を持ち、上端部をわずかにつまみあげる。	内面の口縁部下方にはヘラ削りが見られる。	色調 暗茶褐色 胎土 密 烧成 硬 残部 1/8 黒褐色粘質土層
46 ・ 47	甕 (体部)	甕内式の甕の体部である。非常に薄い器壁を持つ。	外面には右上がりの細かい叩きが施され、内面はヘラ削り。	色調 暗茶褐色 胎土 密で金墨母を含む 焼成 硬 黒褐色粘質土層
37 ・ 43	蓋・甕 (底部)	蓋・甕の底部で、平底のものと上げ底のものがある。 (37)は、突出した底部を持ち、大きく開いて立ちあがり、体部の最大径が肩部より下半にくると考えられる。	(37)は右上がりの粗い叩き目を持つ。 (38)、(39)は内面をハケで調整され、前者は外面にヘラ磨きが施される。 (40)、(42)は内面がヘラ削りされ、(41)、(43)は外面をハケ調整される。	色調 暗黄褐色 (38, 39, 41, 42) 灰褐色 (37, 43) 淡赤褐色 (40) 胎土 良 焼成 硬 (40のみ軟) 残部 底部完存 黒褐色粘質土層 (38, 39, 40, 41) SD-1 (37, 42, 43)
36	ミニチュア 土器	直径4.0cmを測る平底と、やや内窓気株に斜め上方に伸びる体部とからなる。	内面の口縁部下方にはヘラ削りが見られる。	色調 暗茶褐色 胎土 密 烧成 硬 残部 1/8 黒褐色粘質土層

## 2. 遺物観察表 (木製品)

番号	種類	形態の特徴	備考
1	火薬臼	<ul style="list-style-type: none"> <li>全長 20.8 cm、幅 2.8 cm、厚さ 1.5 cm の完形成品。</li> <li>2つの孔と 2つの窪みが認められ、孔は一方に向かっており、火をうけて焼けこげている。</li> <li>2つの窪みは、側面に切り込みを入れてあり、未使用。</li> <li>板の片端を斜めに切る。</li> <li>臼の底の窪みは、中央部が突出し、周囲が窪む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SD-1 出土</li> <li>針葉樹</li> </ul>
2		<ul style="list-style-type: none"> <li>片端を欠損した、幅 4 cm、厚さ約 1.8 cm の板材。</li> <li>6つの孔が認められる。孔は深く、また貫通しているものもあり、1に比べなんらかの理由で、発火効率が悪かったと推定される。</li> <li>板の片端を斜めにきる。</li> <li>臼の底の窪みは、中央部が突出し、周囲が窪む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SD-1 出土</li> <li>針葉樹</li> </ul>
3	木薬	<ul style="list-style-type: none"> <li>全長 14.1 cm、直径 7.5 cm。</li> <li>丸木の両端を削って整形。</li> <li>中央に、両側から削るようにして、V字形の溝を一周つける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SD-1 出土</li> <li>広葉樹</li> </ul>
4	四足盤	<ul style="list-style-type: none"> <li>全体に腐食が著しい。</li> <li>脚部の断片が残る。</li> <li>盤の端部は、上方にのびている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SD-1 出土</li> <li>針葉樹</li> </ul>
5	出下駄輪櫛	<ul style="list-style-type: none"> <li>直径約 1.5 cm、残存長 7.2.5 cm。</li> <li>枝を丸く曲げたものであるが、樹皮は認められなかった。</li> <li>先端部は欠損しているが、下端は 2.5 cm ほど削る。上面は先端が薄くなるように削る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SD-1 出土</li> <li>広葉樹</li> </ul>
6	組合せ部材	<ul style="list-style-type: none"> <li>全長 15.9 cm、直径 1.3 cm、孔は 1.1 × 1.1 cm。</li> <li>端部を丸く削り出し、柄頭は円頭状に削り出す。納頭寄りに一孔をあける。</li> <li>一方の端部は削って整形。</li> <li>断面は円形。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SD-1 出土</li> <li>針葉樹</li> </ul>
7	棒材	<ul style="list-style-type: none"> <li>残存長 29.2 cm、直径 6.5 cm。</li> <li>端部を円頭状に削り出す。</li> <li>全体に火をうけ、焼けこげている。</li> <li>丸木を使用する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SD-1 出土</li> <li>針葉樹</li> </ul>
8		<ul style="list-style-type: none"> <li>残存長 113.6 cm。断面は直徑 4 cm の多角形。</li> <li>欠損が著しいが、片端を丸く削り出し、先端を面取りする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SD-1 出土</li> <li>針葉樹</li> </ul>
9		<ul style="list-style-type: none"> <li>全長 8.8 cm、幅 4.2 cm。断面は半円形。</li> <li>両端を削り丸味をもたせ、全体を面取りする。</li> <li>一方の端は削って丸味をもたせ、芯は折ったものと推定。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SD-1 出土</li> <li>針葉樹</li> </ul>

番号	種類	形態の特徴	備考
10	棒材	○残存長37.7cm。断面は2.9×2.4cmの梢円形。 ○端部を斜めに削り、先端に丸味をもたせる。	○SD-1出土 ○針葉樹
11	板材	○残存長16.4cm、幅3.25cm、厚さ0.95cm。 ○欠損が著しいが、端部を錐状に尖らせたもの。 ○側縁辺を、内側にややカーブするように削って整形する。	○SD-1出土 ○針葉樹
12	棒材	○残存長101.3cm、幅約6.8cmの角材。 ○欠損しているが、端部を斜めに削る。	○SD-1出土 ○針葉樹
13		○残存長60.4cm。断面は3.0×2.4cmの多角形。 ○両端は欠損しているが、全体に面取りされている。	○SD-1出土 ○針葉樹
14	板材	○残存長37.65cm、幅7.2cm。 ○表面を手斧で削り、整形している。手斧の幅は約3cm。 ○片端欠損。	○SD-1出土 ○針葉樹
15		○残存長26.7cm、幅8.6cm。 ○両端は欠損しているが、表面を手斧で削り整形している。 手斧の幅は約4cm。	○SD-1出土 ○針葉樹
16		○残存長31.5cm、幅2.7cm、厚さ1.0cm。孔径約0.34cm。 ○9つの孔が、約3.5cmの間隔で一列に認められる。 ○全体に磨いてある。 ○断面は梢円形。	○SD-1出土 ○針葉樹
17		○残存長24.1cm、幅6.8cm、厚さ1.4cm。孔は0.9×0.6cm。 ○欠損しているが、端部を斜めに切り落し、隅に方形の穿孔。	○SD-1出土 ○針葉樹
18		○全長40.6cm、幅1.2～4.4cm、厚さ2.0～2.9cm。 ○端から長さ9cmほどまで、幅を半分ほどに切りとり、撫部に整形している。揉りの抉りは節を利用している。 ○反対の端部は、火をうけ焼けこげている。 ○板の上面に手斧痕が認められる。	○第Ⅲ層出土 ○針葉樹
19	組合せ部材	○全長26.2cm、幅3.1cm、厚さ1.6cm。断面は半円？ ○両端近くに、幅約2.4cm、深さ0.1cmの浅い窪みを入れる。 ○端部は面取りされている。	○第Ⅲ層出土 ○針葉樹
20	用途不明	○全長9.1cm、幅約3.7cm、厚さ0.7cm、孔径0.4cm。 ○四隅に4つの小孔が認められる。孔は斜めに穿たれている。 ○小孔の内側に平行に、使用痕かと思われるものが認められる。	○第Ⅲ層出土 ○針葉樹
21	曲物	○直径11.1cm、厚さ1.0cm。 ○底板で、半分欠損。	○耕作土層出土 ○針葉樹

# 図 版



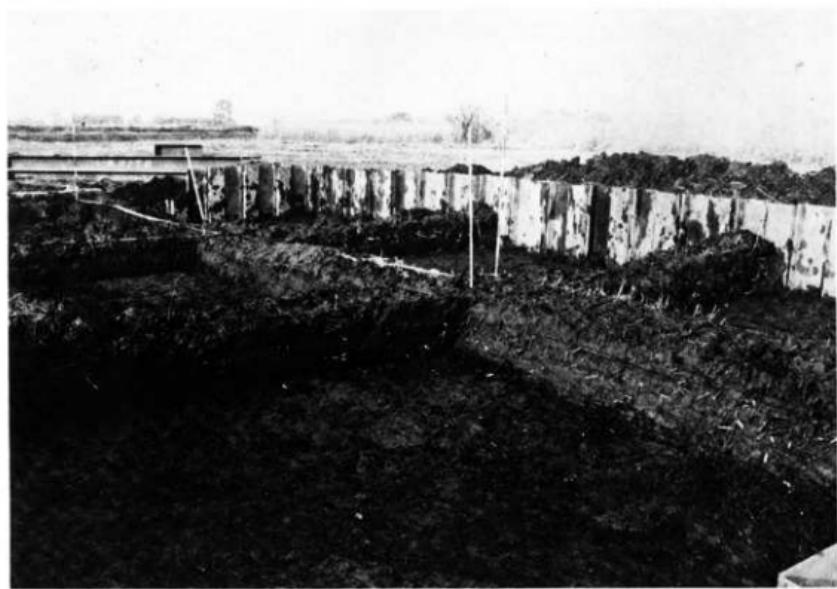
旭遺跡調査地区全景（西北より）



吉武城遺跡（西北より）



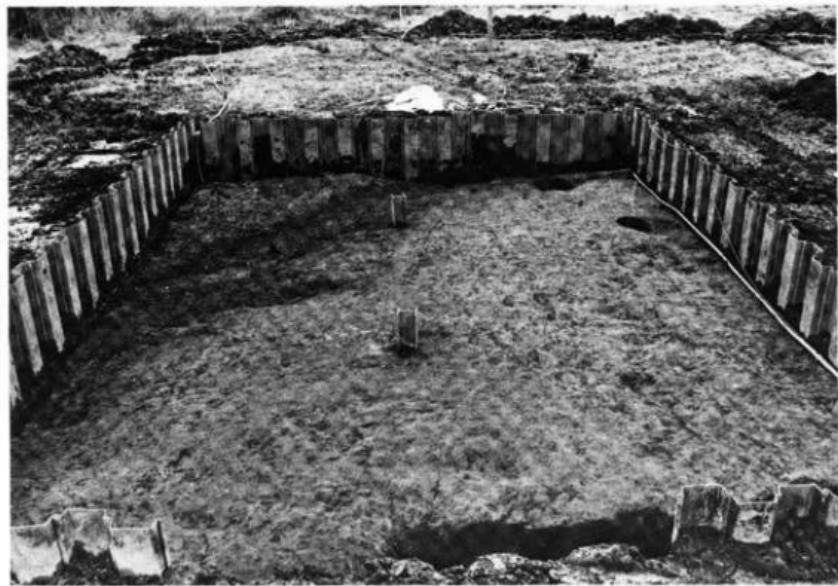
tegishita (南より)



グリッド調査状況



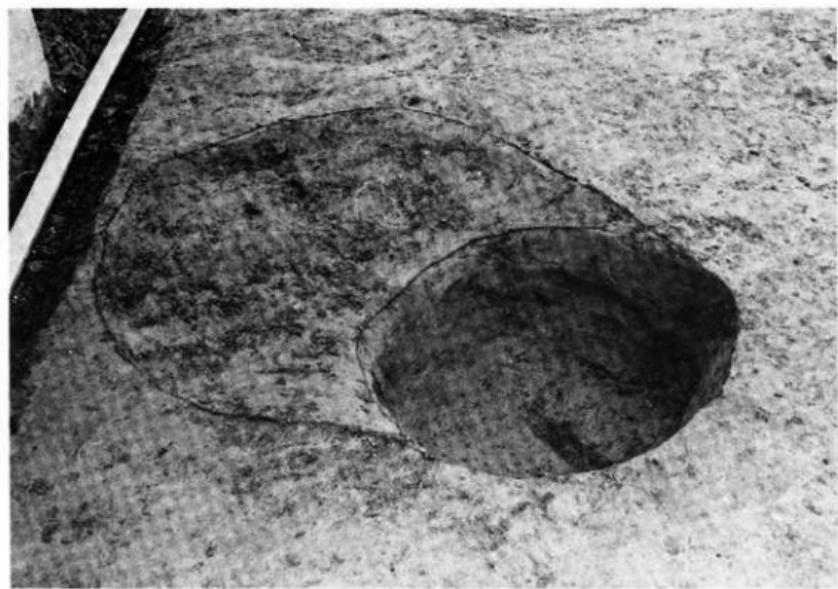
SD-1 木製品出土状況（北東より）



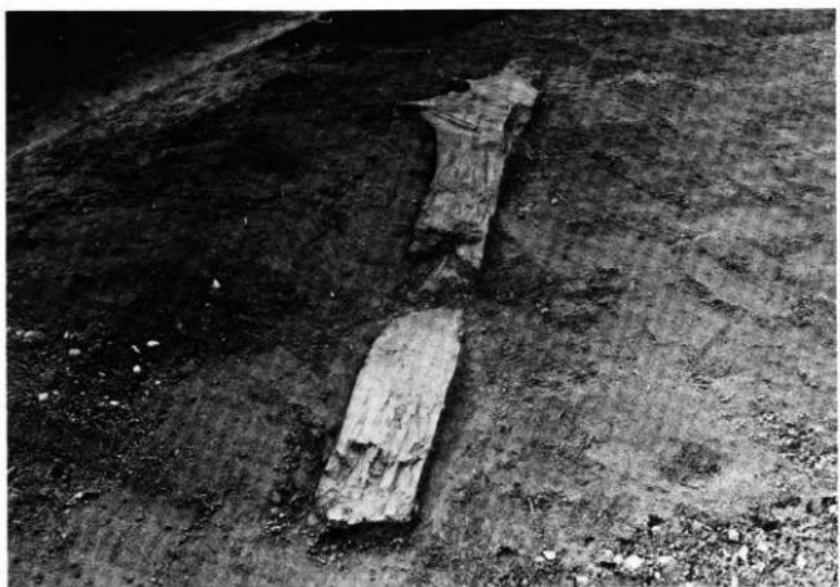
遺構全景（北より）



木製品出土状況



ピット1（南より）



第IV層 流木出土状況（南より）



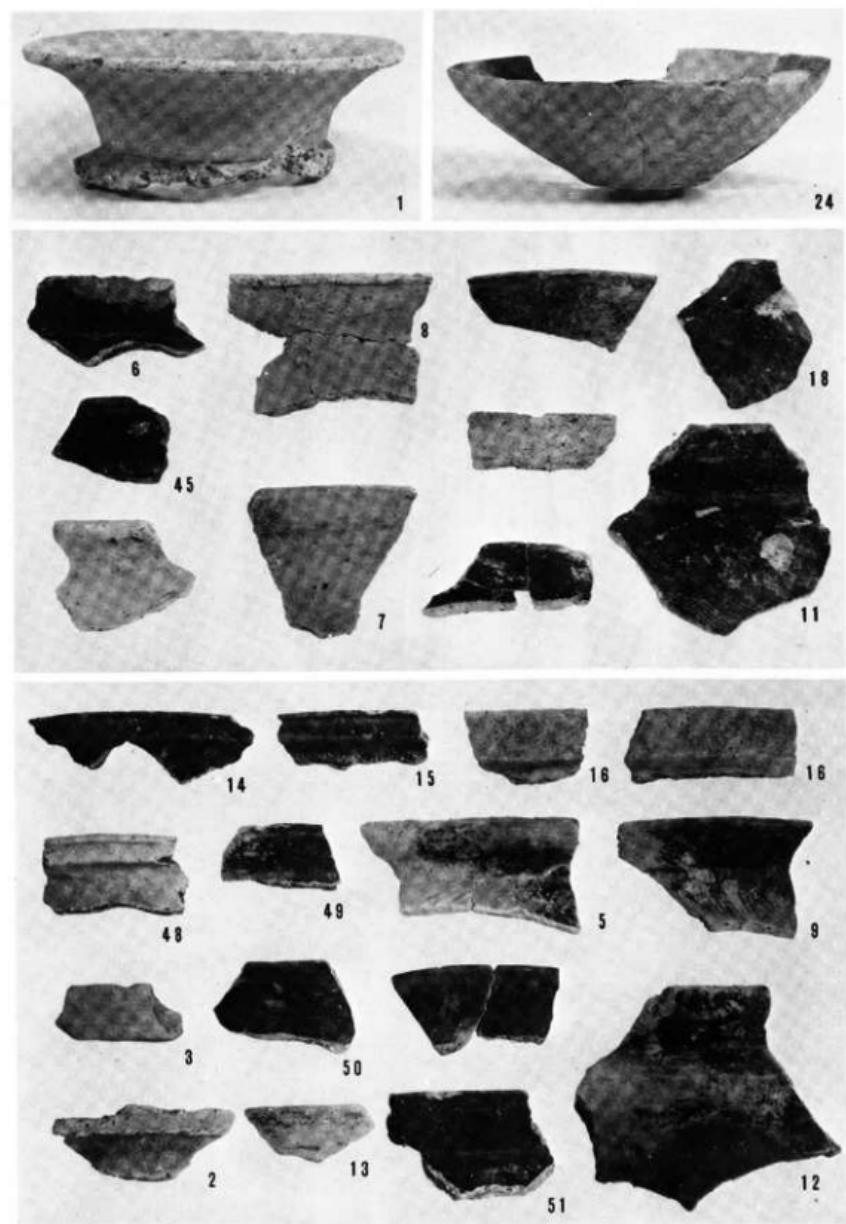
第IV層 流木盛り検出状況（北より）



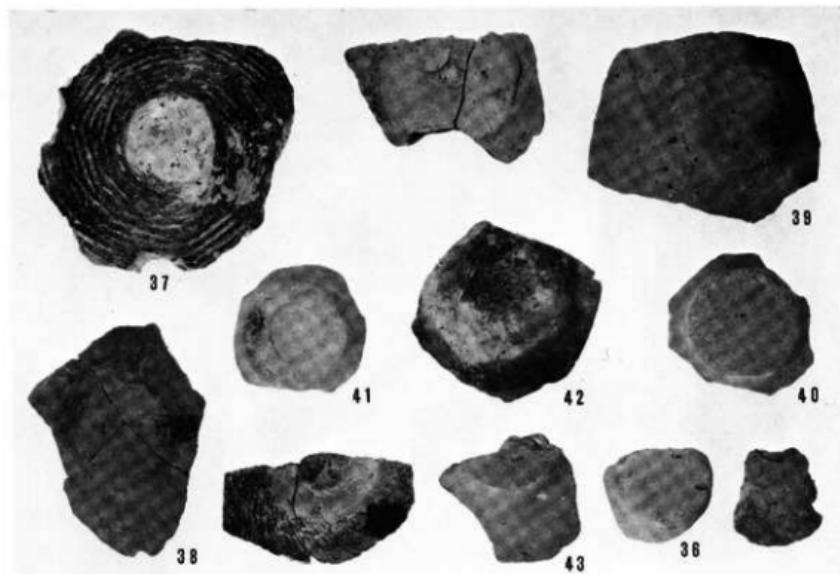
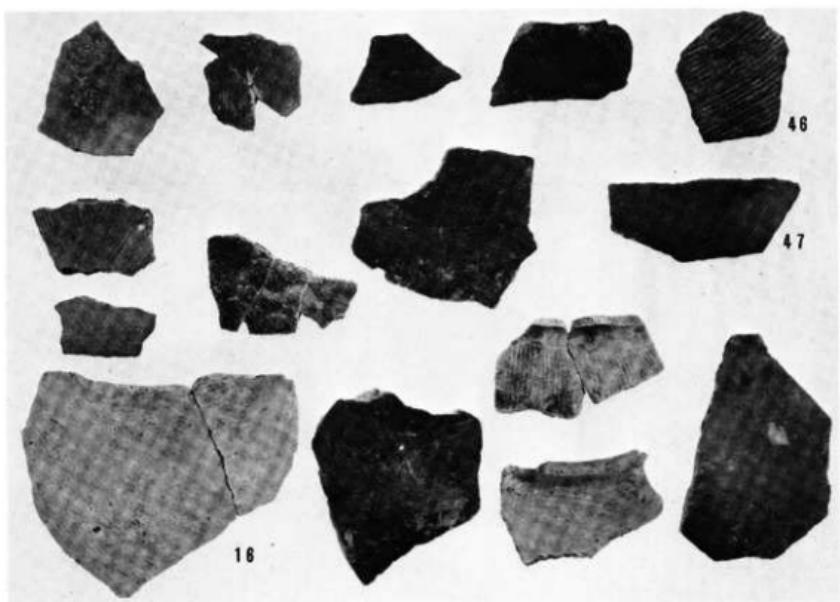
Aグリッド掘下げ

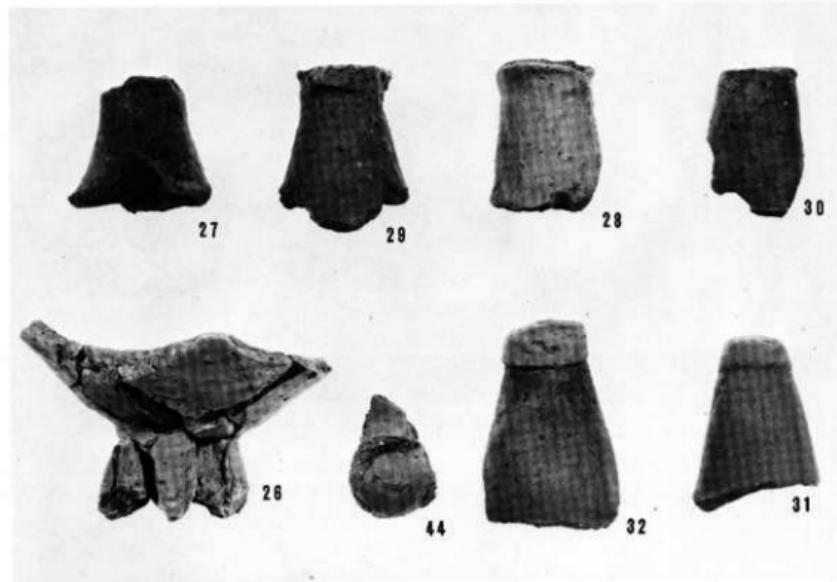


Aグリッド土層堆積状況(東より)

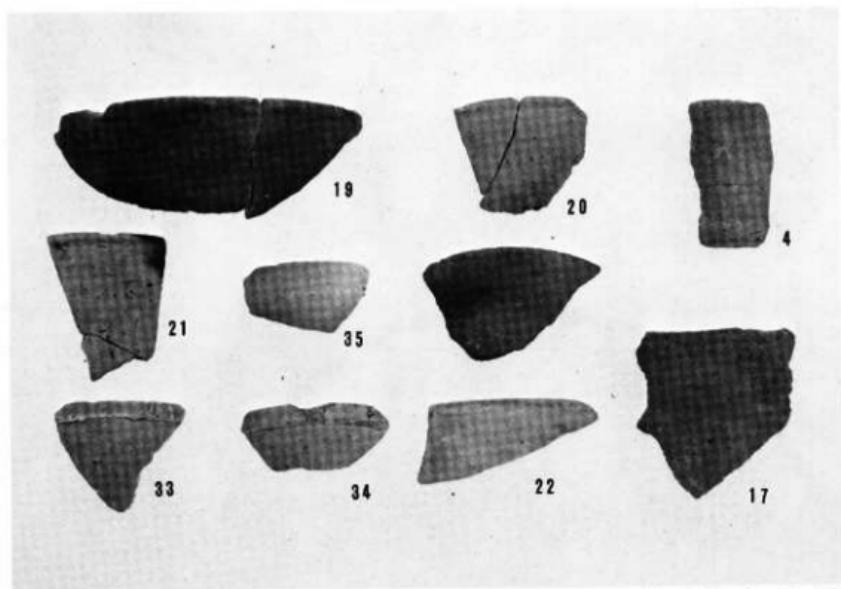


図版八 土器(2) 壺・甌・ミニチュア土器



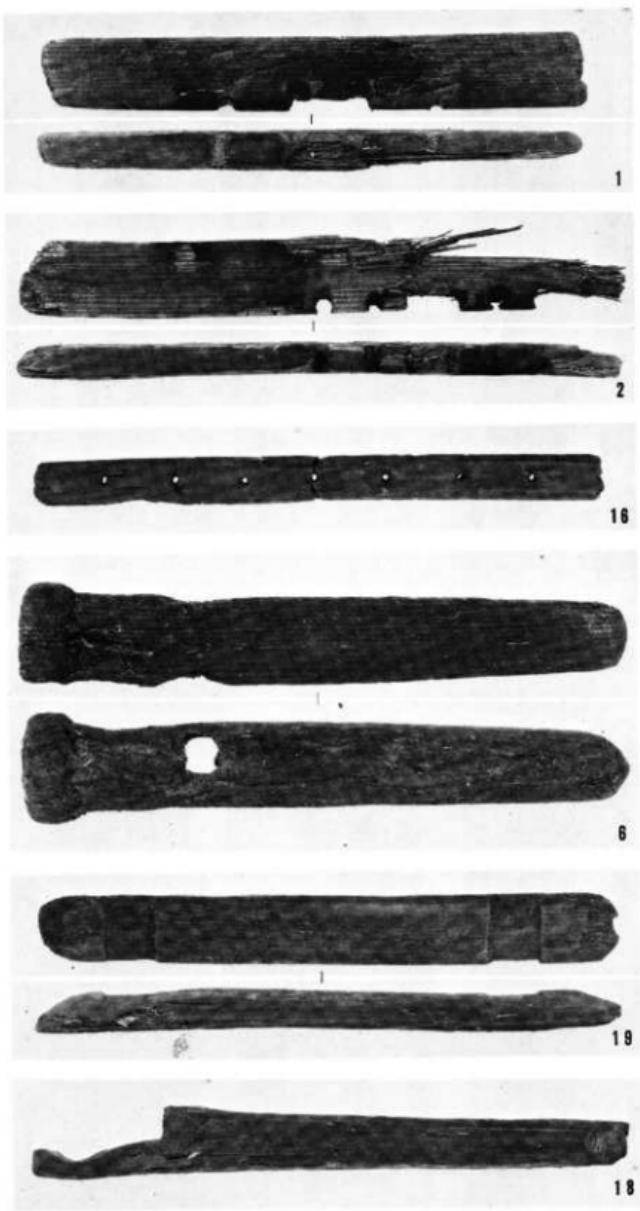


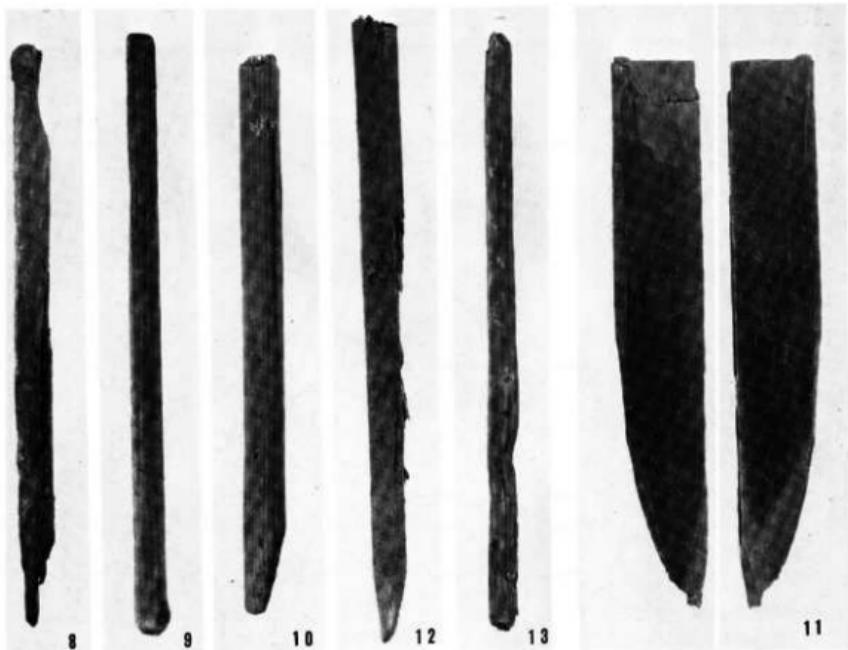
高杯（脚部ほか）



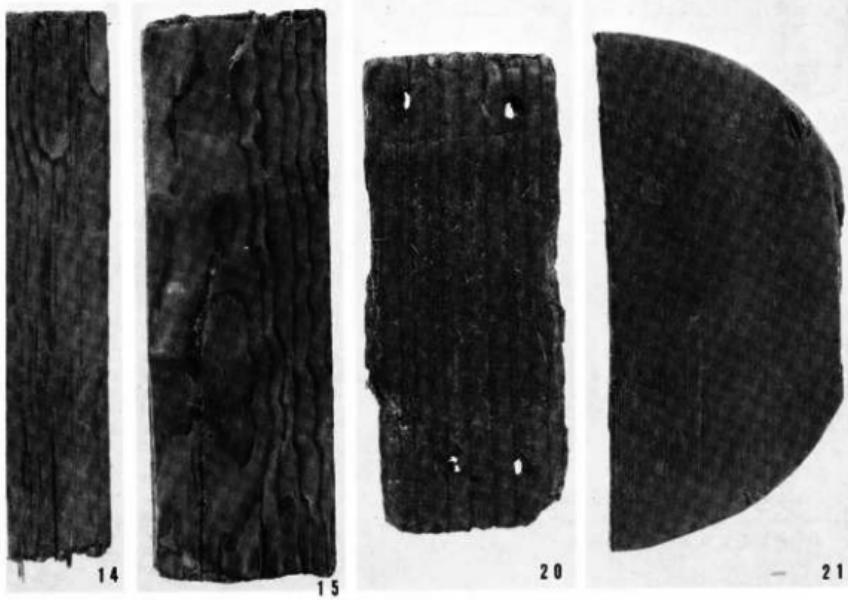
高杯・器台・直口壺・小壺



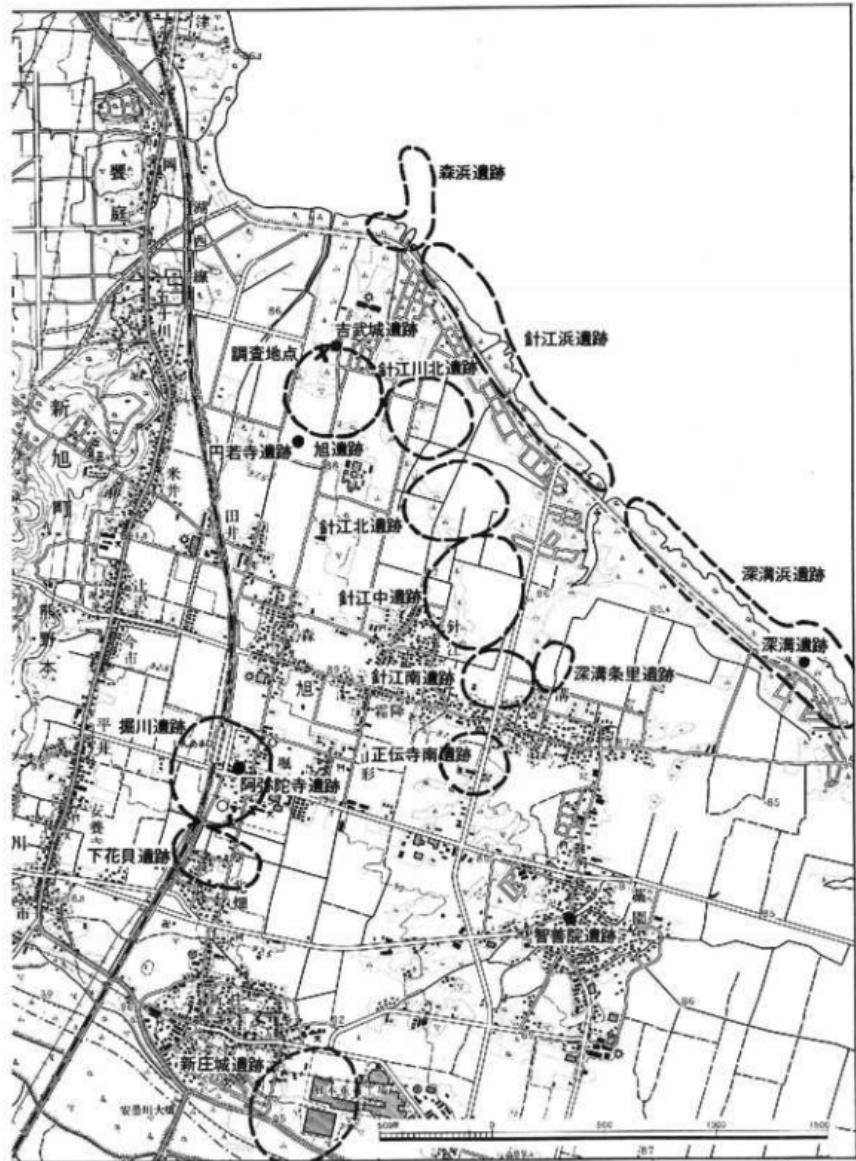




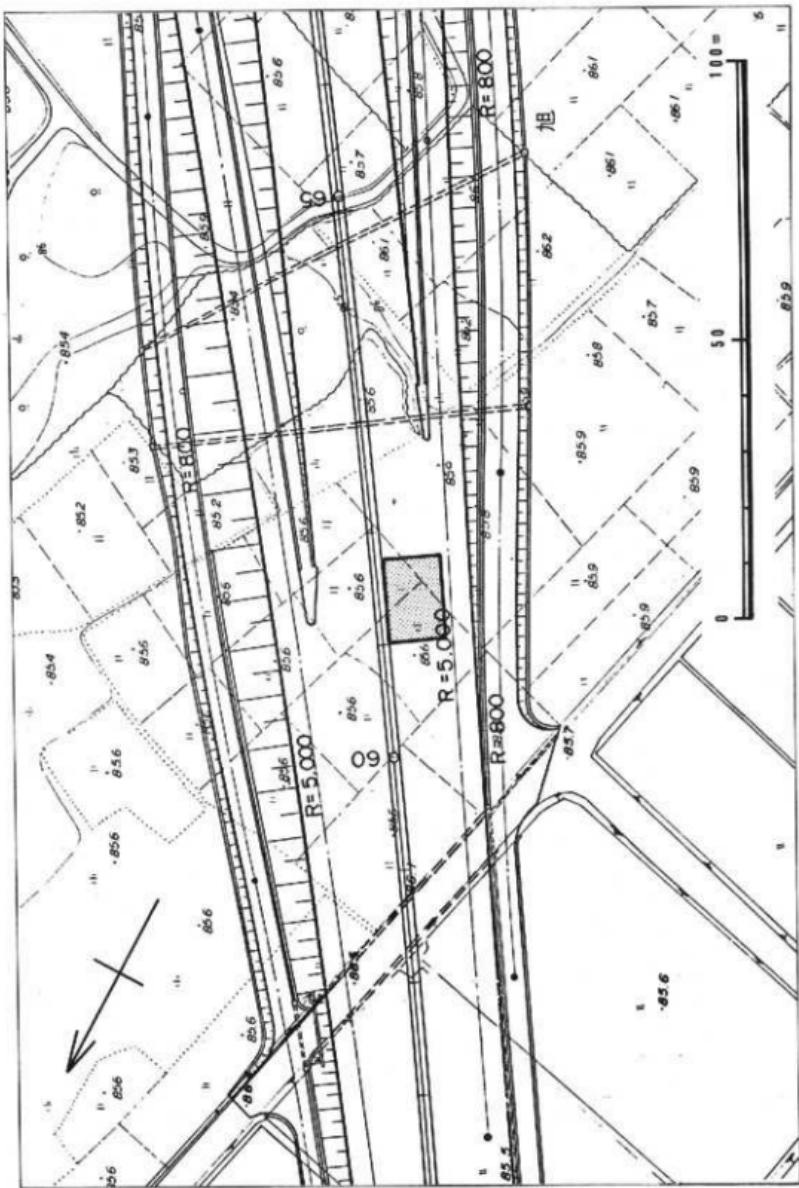
11

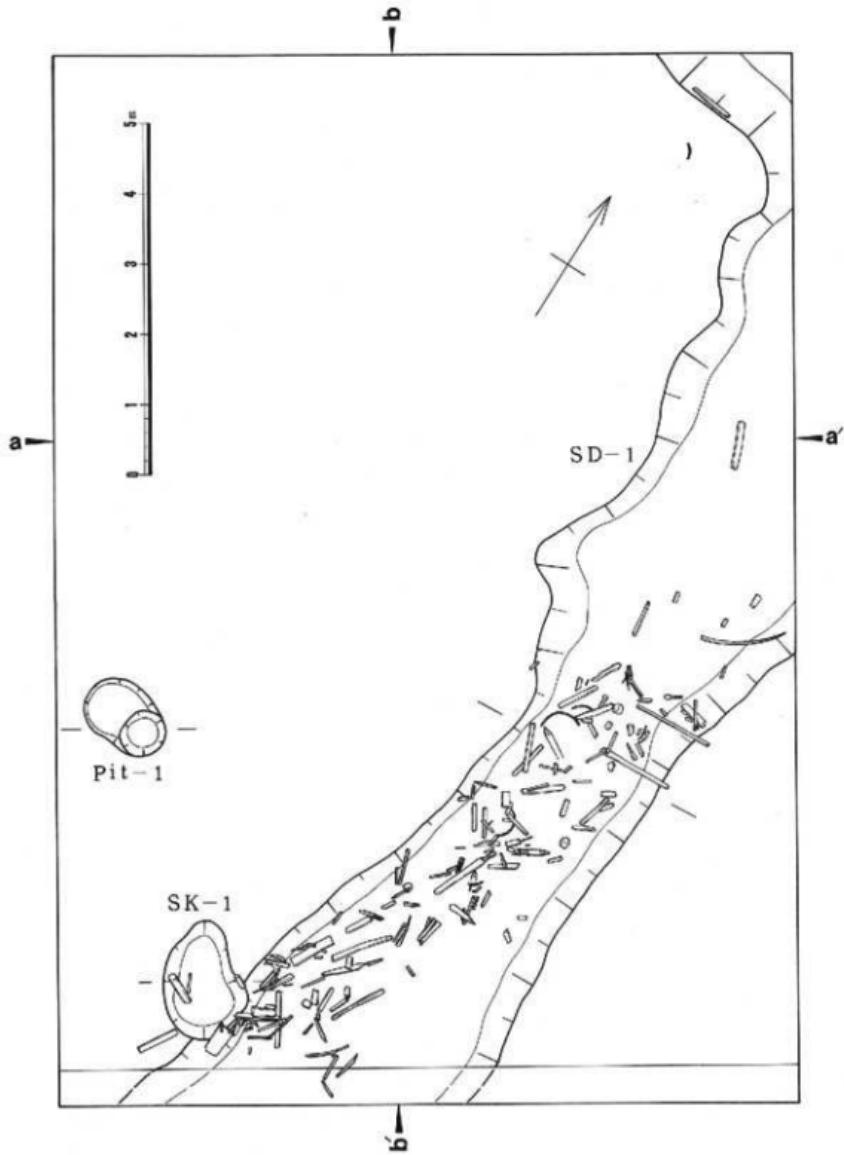


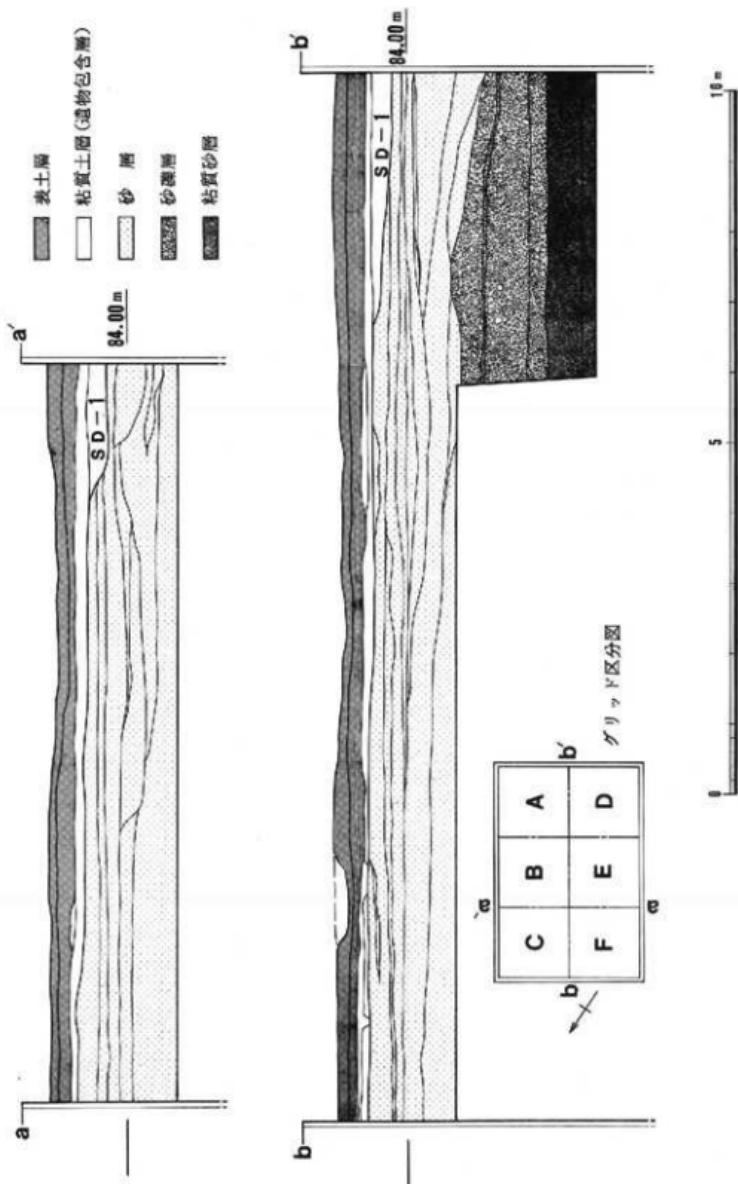
— 21

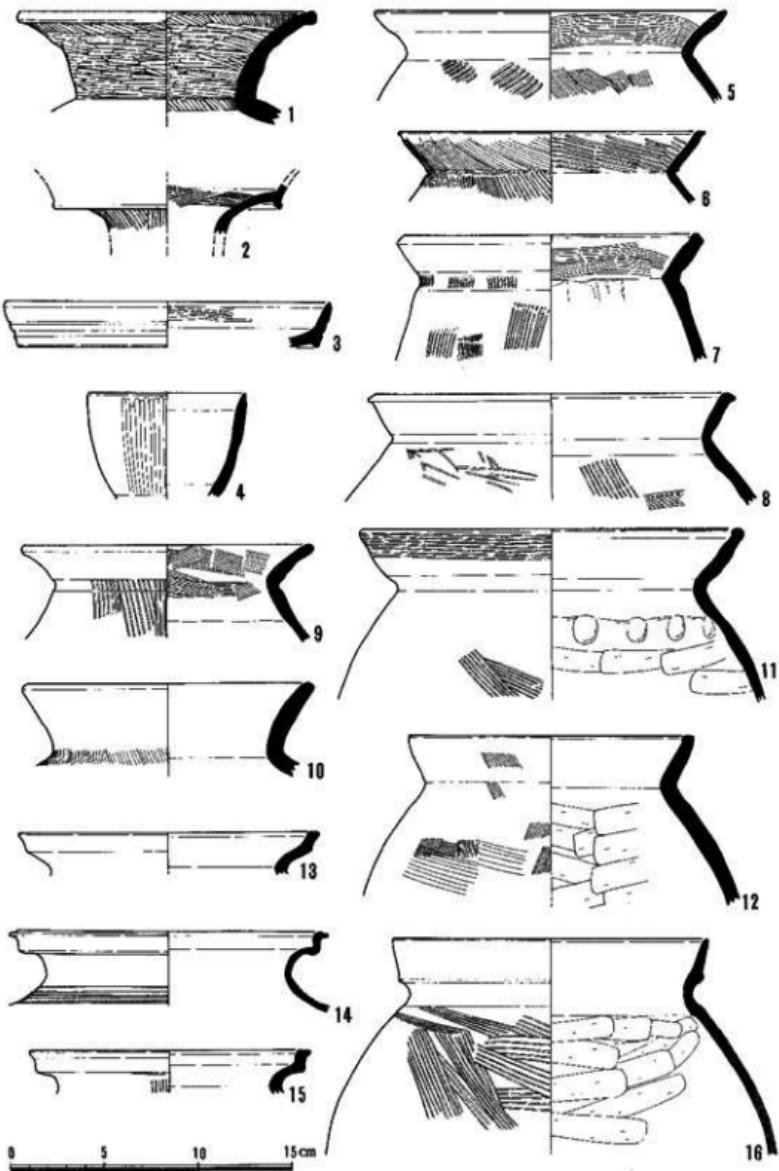


新旭町湖岸部における遺跡分布

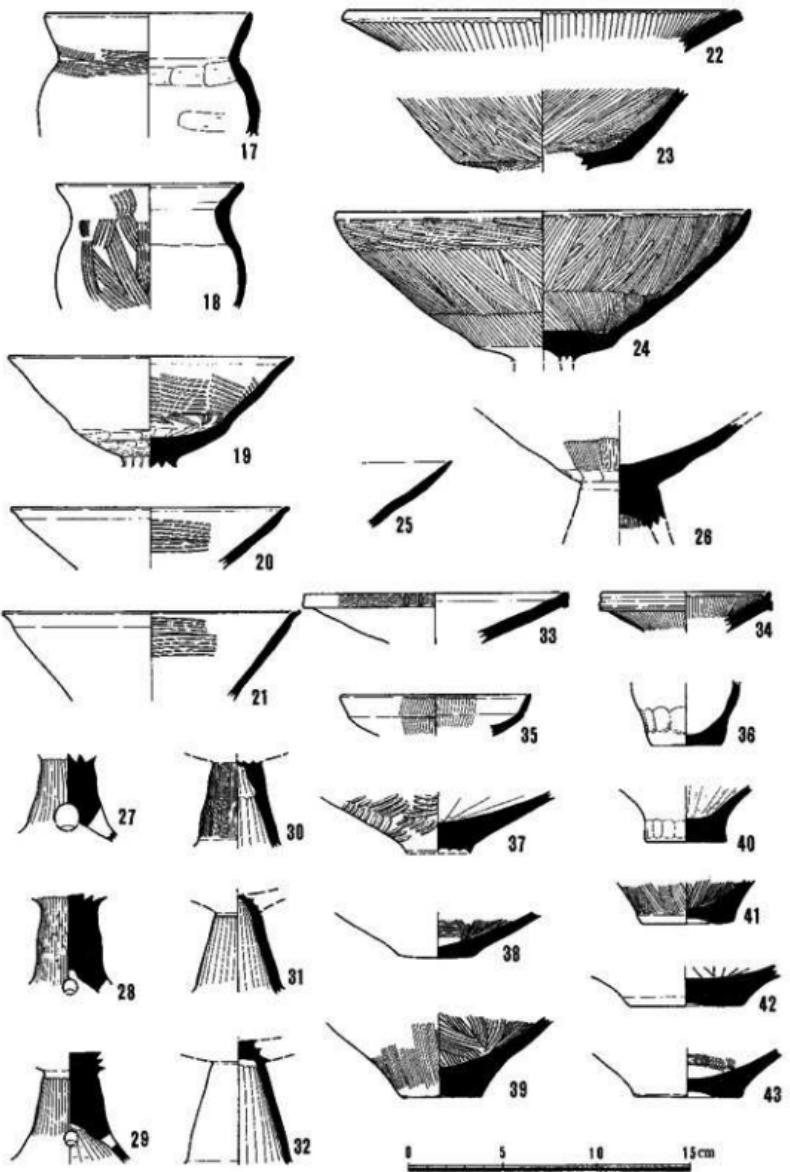


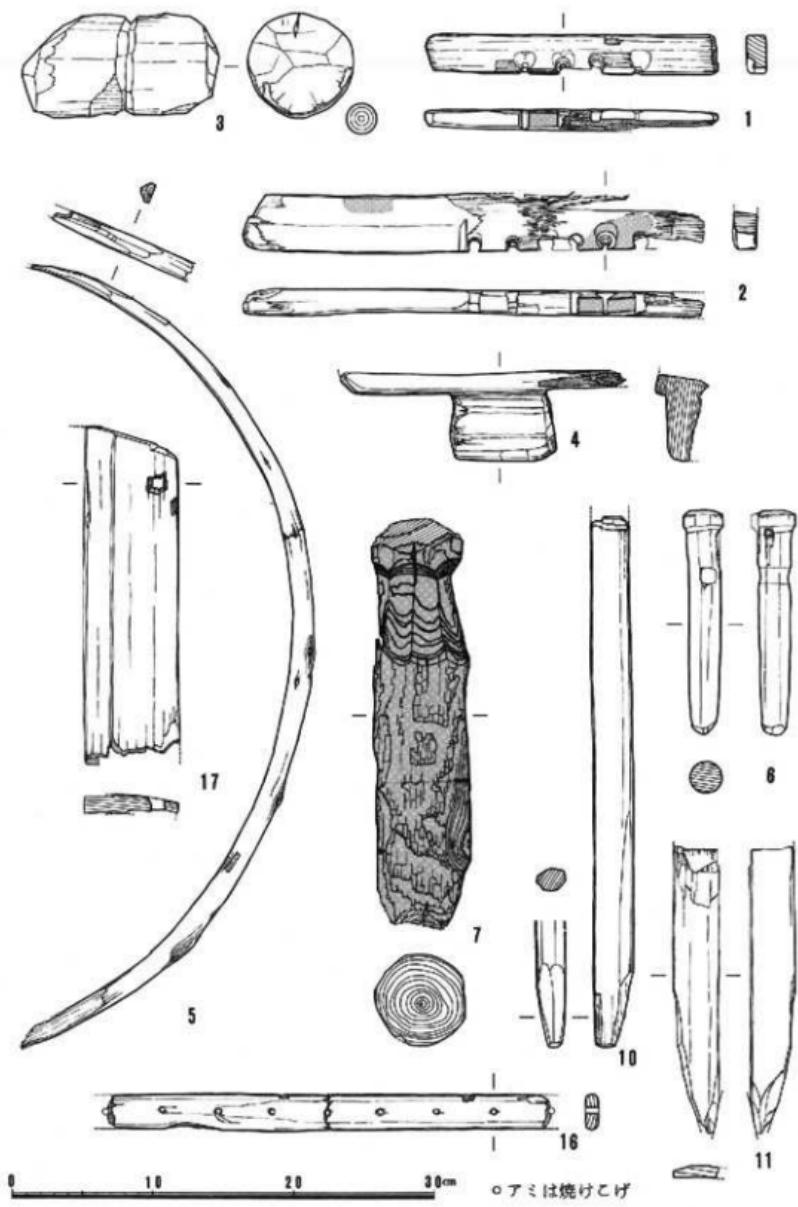


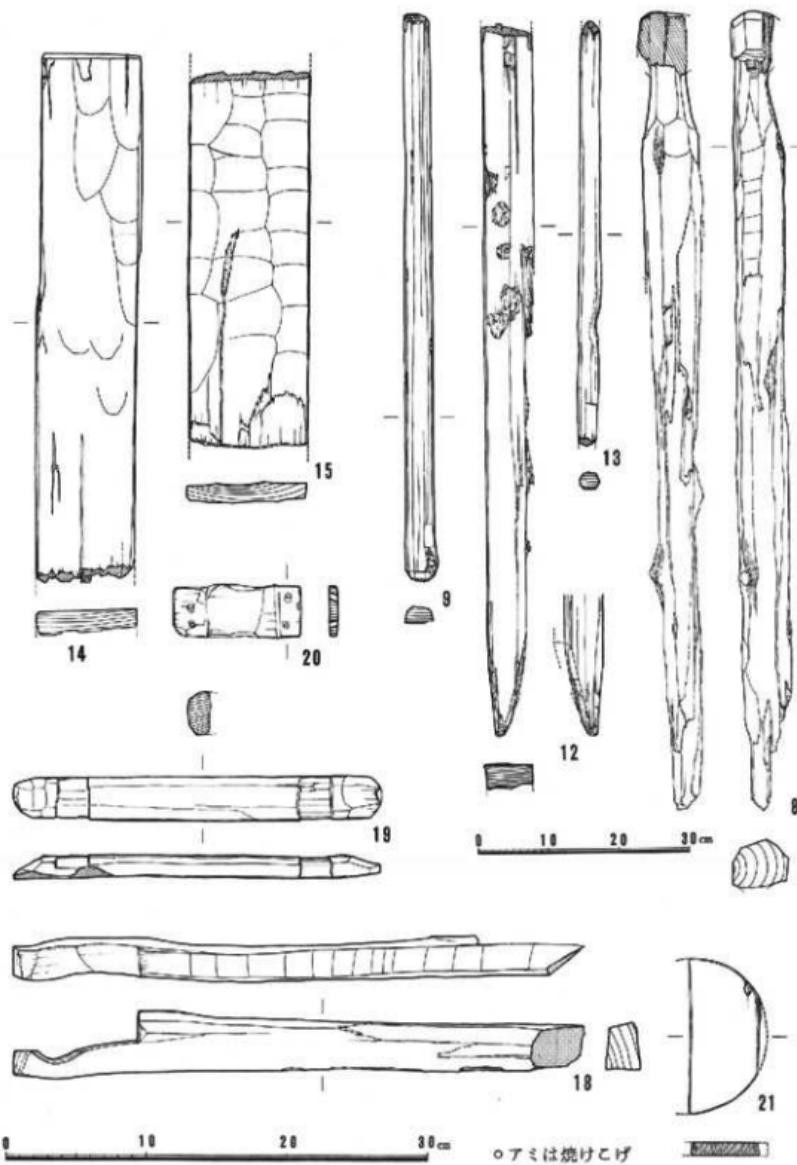




図版  
十八  
土器実測図(2)







---

国道 161号線バイパス開通遺跡調査概要(昭和56年度) 1

針江遺跡群旭遺跡発掘調査概要

昭和 57 年 3 月 10 日

編 集 滋 賀 県 教 育 委 員 会

発 行 滋 賀 県 教 育 委 員 会

助 滋 賀 県 文 化 財 保 護 協 会

印 刷 富 士 出 版 印 刷 株 式 会 社

---